の學者が憲法は出來たもんで、拵へたもんぢやねえと云ふのは、其間の消息を明かにしたものんだ。だから、いくら其主義に遲れて舊いものだつて其主義にしてだ、果して實際の時勢は適合して居れば、彼を棄てゝ此を取るのは立法家の役目だ。かう見ねえよ、株式會社の設立に關する現行商法の認可主義は、果して現今の無責任極まる、利己主義一點張りの、他は如何でも可い己許が可かれ主義の、何にも知らぬ後家や子供をだまして財布をはたかせ、盛に虛僞の報告を流布して權利株を騰貴せしめ、其間に立つて自分の懷さへ肥せば、跡は野となれ山となれ主義の、所謂泡沫會社發起人の不正行爲を豫防して居るや否やだ。此點から見れば舊商法の許可主義がどれ程現今の時勢に適合して居るか知んねえ。林檎を取るに樹をぶつ切つて了ふのは眞人間のする事ぢやねえ。斯うなつちや立法家は神田の伯母さんぢやなくて、印度人だ。

其處で當局者も考へた。立法の主義許りが進んで居たつて、實際の時代が遲れて居れば詮方のねえ事だ……てんで、會社設立の折には舊商法の遺物を引ずり出して來て發起人の身元調と云ふものを行て居る。併し此身元調と云ふものの效力は、無論現行法には寸毫も規定してねえ。道理で形式一遍のものに過ぎねえのは怪しむに足らぬ。現行商法によれば、發起人の株式の總數を引受けるか、さもなくて、一般に株式を募集する折には、創立總會の終結によつて會社は完全に成立するのだ。愈々會社が成立すれば、會社と發起人との關係は全々零となつて、夫から先の責任は取締役が一切てれを脊負ひ込むことゝなるのだ發起人の身元調！ソンナものが此際何の役に立つもんか。馬鹿を云ふな。

一歩を讓つてだ、會社發起人の資產信用にして缺ける所がなければ幸福だが此點に於て缺けて居つたらば、當局はこれに對して如何なる處分をする氣か聞いて見てえ。會社成立の手續や、定款の規定が法律に違反して居れば、手もなくこれを認可せぬだけだが、發起人の身元が可けねえから、會社の設立は認可

せぬとも云はれめえ。會社は法律の規定に遵據して立派に成立して居るんだから唯其會社の營業を許可せぬと云ふより外はなからう。併其筋で營業を許可して呉なければ、其目的例へば銀行を開くことが出來ねえから、會社は目的不能の故を以て自然解散するより外に詮方がねえ。處が法律に所謂目的不能とは、無論斯樣な行政上又は司法上の處分を指して居ねえことは明だ。現に商法の七十四條は目的不能の外に裁判所の命令を以て會社解散の一事由とし、民法の六十八條は、目的不能の外に設立許可の取消を以て法人解散の一事由として居るぢやねえか。加之ならず、會社は既に成立して居ても、此際には尙其目的の一部だも行つて居ねえんだから發起人の身元に缺ける處があつて認可せれねえのは、廣い意味での目的不能かも知んねえが、法律に所謂目的不能ではねえ目的が能か不能かはやつて見ねえ以上は判らねえ事た。其筋では如何云ふ風に此間の關係を解釋して居るのかい。べらんめえ！

## ▲立法者の迂愚

二歩を讓つてだ。發起人の身元に缺ける所があつて、其筋から營業の許可が得られず、目的不能の故を以て會社は自然解散せねばならぬことゝなつたと假定する。併し其結果は豫想しても實に恐ろしい事ぢやねえか。會社が既に成立して居るにも拘らず、其筋から營業の免許を得られねえやうな會社なら、如何せ碌な會社である氣遣がねえ。其處で愈解散と決まれば、損害を被るものは株式の引受人、卽ち一般の公衆ばかりだ。泡沫會社の發起人は、當初つから會社抔の設立は無論念頭には置いて居ねえ、何にも知らぬ後家や子供の財布をはたかせて、盛に虛僞の報告をやつて、權利株の賣買で以て、自己の私腹をさへ肥せば夫で可んだから、目的不能の故を以て會社が解散しようがしまいが我不關焉と空嘯いて居るに相違ねえ。第一かゝる無責任極まる發起人の寄合だもの一般公衆から募つた株金が少しも手つかずに端然殘つて居よう筈がねえ。だか

ら、コンナ會社は解散に次いで、破產となるのは目に見るやうなもんだ。氣の毒なのは何にも知らぬ一般の公衆だ。其筋で會社の設立を認可してさへくれゝば、への字なりにも業務を執行して、時には利益を得ることもあらうと云ふのに、業務どころか會社が出來たかと思ふと直ぐに潰破れて、出した金が戻つて來ねえとは、自業自得、己の不明を責めるより外はねえとは云ひ條、其筋も隨分罪なことをするものだ。コンナ折に舊商法の許可主義を採つて居さへすればまだ株式の募集に著手せぬ以前に、端然と捌がつくので、一般公衆は決してコンナ損害を被らぬ譯だ。書の上ばかりで研究した立法家の主義は實際には何の役にも立たねえ。神田の伯母さんがいくら一人で頑張つて居たつて、時勢が違つて居れば詮方がねえ。

併し神田の伯母さんも此頃になつて漸く目が覺めたと見えて、來るべき議會に提出する商法の改正案には、成立後の會社と發起人との關係を付けることになつた相だ。即ち其百四十二條にコンナ事が規定されてある相だ。

發起人が會社の設立に關し其任務を怠りたる時は會社に對し連帶して損害賠償の責に任ず。

發起人に惡意又は重大なる過失ありたる時は其發起人は第三者に對しても連帶して損害賠償の責に任ず。

會社が成立せざる場合に於ては發起人は會社の設立に關して爲したる行爲に付き連帶して損害賠償の責に任ず。

前項の場合に於て會社の設立に關して支出したる費用は發起人の負擔とす。

右の規定は現行商法の認可主義に對する一大矛盾であるのみならず、又立法上一の退歩したる主義を實現したものだ。併し時勢に適合する點に於ては、遙かにの絕對的なる認可主義に勝つて居る。併し神田の伯母さんは、退歩序に何せ會社の設立に關して許可主義を採らなかつたか。これが一大疑問だ。こゝに

至つて神田の伯母さんは依然として神田の伯母さんだ。成程此規定は會社の發起人を追窮すると極めて嚴格であるから、豫め泡沫會社の發起人を威嚇するの效力は多少あるに相違ねえ。併し儲けたさが一心で、他に何物をも顧みるのは追がねえ此節の發起人が、コンナ制裁などに恐れて、引込んで居るものか。損害賠償や費用の負擔などに恐れて、ぢつとして居るやうな、ソンナ生優して發起人が此節居ると思ふか。だから、立法家は昔から神田の伯母さんだと云ふんだ。第一コンナ規定は會社の濫設を豫防すると云ふよりも、發起人を苛責るのに急であつて、其株式を引受けた一般公衆を保護するの精神に缺けて居る。損害賠償と云つた處が、根が泡沫會社の發起人だもの、損害を賠償する資產などがあるものか。發起人は唯一時會社の設立によつて不儀の金儲をするばかりで、跡は惡錢身につかず、一文なしの元の杢阿彌に返る性質のものだ。コンナ徒輩に對して損害賠償の連帶責任を負はす？　冗談云つちや可けねえ。神田の伯母さん時勢を知らぬにも程があら。夫よりも災を未然に防ぐ舊商法の許可主義を採る方がどれ程時勢に適合して居か知んねえ。何！夫では主義が退歩する？　主義が退歩したつて進歩したつて、實際の時勢に適合せぬ法律が何になるかだ。

## ▲犯人狀者の處罰

會社の發起人に對する我が立法家の態度は上述の如く、全く神田の伯母さんだが。重役に對しては神田の伯母さんも漸う目が覺めて來たからめでたい。來るべき議會に提出される商法の改正案には、べらんめえが先日罵倒して置いたクリミナロイドが愈〳〵クリミナルとなつて、ドシ〳〵罰せられる規定が設けられてある相だから、社會の幸福の爲實に何よりの事と云はなければなんねえ。卽ち其二百六十一條に、取締役、株式合資會社の業務を執行する社員、監査役又は株式會社若くは株式合資會社の清算人若くは支配人が其任務に背きたる行

爲を爲し、會社に財産上の損害を加へたる時は五年以下の懲役又は五千圓以下の罰金に處す』とあつて此未遂罪も矢張り罰することゝなつて居る。夫から又『發起人、取締役、株式合資會社の業務執行社員、監査役、清算人、支配人、檢査役等が職務の執行に關し、不正の利益を收受若くは要求し又は收受を約束したる時は三年以下の懲役又は三千圓以下の罰金に處し』又『前記の者に不正の利益を交附若くは提供し、又は交附を約束したる者も一年以下の懲役又は千圓以下の罰金に處す』とある、夫から同法百七十七條には『取締役が其任務を怠りたる時は會社に對し連帶して賠償の責に任ず』又『取締役が法令又は定款に反する行爲を爲したる時は株主總會の決議に依りたる場合と雖も、第三者に對して連帶して賠償の責に任ず』と規定せられてある。至極尤もな改正だ。唯收賄者は三年以下の懲役三千圓以下の罰金と云ふ重い刑罰に處せられるのに、贈收者の刑罰が一年以下の懲役、一千圓以下の罰金ではちと輕過ぎるぢやねえか。



此點に關しては我が立法家は矢張り神田の伯母さん臭い。クリミナロイドに關する立法家の道德的觀念が低いといはなければならねえ。併し二百六十一條の未遂罪を罰したのと重役の連帶責任を規定した手際は、天晴見あげた腕前だ。神田の伯母さんらしくねえ遣方だ。一體重役の兼任てえのは近頃の流行物で、曾て澁澤の爺さんが歐米を漫遊した折、西洋人が其肩書の多いのに驚いたと云ふ話だが、此奴は日本ばかりぢやねえ。西洋にも此例は澤山ある。モット痛い例がいくらもある。一例を擧ぐれば紐育市では一人で四十五の鐵道會社の重役になつてる不屆者がある。二十や三十の會社のかけ持をやつてる奴は尤ではかるほど居やがるから驚くぢやねえか。ソンナ無責任なことで會社の經營が出來るものと思ふか、だからロッス氏の如きは大に憤慨して重役の連帶責任を絶叫して居る。西洋ではまだ之を律する法律が出來て居ねえのに、日本で逸早くも此弊害を除却せんとする法律を拵へようと云ふのだもの、豪いと云なければ

なんねえ。唯議會……然ふだクリミナロイドの寄合である議會が、此改正商法を無難に通過するや否やは大問題だが、兎に角に立法家の目が覺めて、クリミナロイドをクリミナルにしようとするの心事は大に諒とすべしだ。神田の伯母さん！豪いぞ、と賞めて置かう。唯此上は國民たる神田の伯母さんも、立法家と共に早く目を覺まして、舊犯罪よりも新犯罪が恐ろしいと云ふ觀念を抱くやうにならねえでは、我國民の將來が案じられると云ふものだ。如何だ、神田の伯母さん！目が覺めたか。何だと、まだ覺めねえと。べらんめえ！

# 國際間の事大主義

## ▲韓國合併は當然

扨々世間には判らねえ奴が澤山あるものだ。朝鮮人は事大主義だから、可けねつて？馬鹿を云へ。事大主義は宇宙の大法だ。凡そ天地間の事物一として此事大主義に支配せられざるはなしだ。此大法はニュートンによつて發明せられた以來、學者間には誰一人これに反對した意見を提出したものもなく宇宙の森羅萬象は悉く此事大主義によつて說明せられて居るのだ。其處へ來ると政治家と云ふ奴は無學なものだ。朝鮮人は事大主義だから可けねえつて云ふことは日本代々の政治家の家傳でゝもあるやうに心得て居るから堪らねえ。コンな無學でようもく政治が出來るものかと思へば實に情ない次第だ。

第一引力と云ふ奴が、此事大主義を恰も的確に證明して居るぢやねえか。俺

等が斯うして地球の上に安閑として生活して居るのも、皆な此事大主義の御蔭だ。此主義がなければ、俺等は地面に固定しねえで、幽靈のやうに浮々空中にぶら下つて居るより外はねえ。太陽系統が斯うして今日のやうに秩序を亂さねえで運行して居るのも事大主義ぢやねえか。國際間だつて、國家内部の關係だつて、皆な此事大主義があるから、今日のやうに秩序が整然として居るのだ。一國には主權者と云ふものがあつて、而して各臣民が其主權に對して絶對に服從して居るから、今日の國家が存在するのだ。事大主義ぢやねえか。國際間の關係だつて、焉ぞ此主義に漏んやだ。朝鮮人だつて宇宙の事物だ。此大法に支配せられねえでは活きて居ることが出來ねえだらうぢやねえか。支那が強い時は支那に附き、露國が強い時には露國に附き、日本が強い時には日本に附く、當然の事だ。政治家と云ふ奴は蚤取眼で以て此間の關係を觀破し而して機宜の處分をするのが本職だ。政治界にも此大法が行はれて居ることを知らねえ日本の政治家に碌なことの出來ねえのは當然だ。

第二に事大主義即ち引力の强弱は如上物質の大小に正比例するものだが、之と同時に物質間の距離の遠近に反比例をして居る。だから國際間の事大主義も常に强國と弱國との距離の遠近に反比例して現れて居る。朝鮮の隣邦と云へば、先づ露國と支那と日本だ。朝鮮人の事大主義が此三國に關して最も著るしく現れて居るのは、寸毫も怪しいことはねえ。數ある朝鮮人の中には偶々耶蘇などに歸依して米國を難有がるものはあつても、政治上には大した現象を示すことのねえは當然の事だ。昔英國は米國を引きつけて居た。だけど、何分にも英米の距離がアンナに遠いのだもの其關係は竟に消滅した。印度との關係も竟には此關係を再現しはしねえかと、内々は恐ろしいやうにも思はれるのだ。夫から現今に於ける列强の植民地政策も亦此關係によつて、力瘤を入れて居る割合に效果が少ねえやうに思はれるのも無理はねえ事なのだ。

べらんめえ

第三には、引力に關する物質の大小は物質の稠度に正比例をして居る。だから國際間の事大主義も、矢張り强國の稠度に正比例を爲して現れて居る。物質の點から云へば、支那はアンナに大きい國だ。だけど、其稠度は近頃になりて非常に小さいものになつた。壓せば潰れ相だ。だから朝鮮との距離がアンナに近くつても朝鮮を引く力がなかつた。夫から露國だ。之も歐洲の大帝國で、而して朝鮮と直接に境を接して居る。併し此大帝國の稠度も日露戰爭によつて現實曝露の悲哀に陷つた。其處で朝鮮人は已むを得ず支那と露國を見捨てゝ日本に附著いたのだ。朝鮮に對する日本と云ふ物質の稠度は清露兩國より大であつたのだ。距離の點から云ば一葦帶水とは云へ、日韓は海を隔でゝ居る。日本は清露兩國よりも朝鮮への距離が遠い。併し其稠度が近來に至つて俄に大きく成たので、終に朝鮮を引き附る事になつたのだ。宇宙の大法から見れば、嬉しいこともなければ悲しいこともねえ。當然の事だ。事大主義の可否を論ずる日本の政治家は、此際にも矢張り朝鮮人は事大主義だから可けないと云ふだらうがコンナ事で世界の大勢が洞察できるかい。

# 飄然漫遊の記

## ▲矛盾な扮装

べらんめえは現代文明の子である。多淫なる母『矛盾』か、『煩悶』『苦悩』『猜忌』『嫉妬』『虚偽』『浮薄』『虚榮』『疲勞』『邪推』『意地惡』『犯罪』等の男と乳繰り合つた結果生れた子だ。隨つて父は此中の誰であるか今に於て判らぬ。

べらんめえは、右足に佛教法典を踏まへ、左足にバイブルを蹴り、右脇に大學論語を抱へ、左脇にダーウヰンの進化論を小挾んで居る。

べらんめえの扮装は、砲兵工廠通ひの職工よろしくと云ふ體で、洋服姿に下駄穿である、栗々坊主になつたかと思ふと頭髪を延ばして、コスメチックや油などをべつたりと塗つけたハイカラ頭となる。

べらんめえは、兄弟中で最も高い教育を受けた學者だ。併し此教育を受けた爲に、彼は却つて、『日出でゝ耕やし、日入つて憩ふ』ことが能きなくなつた。と云つてロオズヴエルトを擬ねて、孤身奮闘するの勇氣もない。で、過去三十九年の間を何にもせず、愚圖々々に其日を送つて了つた。

べらんめえはヤヌスのやうに前面と背面とに二つ頭を有つて居る。前面の頭は嬉れし相な、如何にも陽氣で、賑で愉快極まるぢやないかと絶叫し相な顏であるが、背面へ廻はつて見ると、如何にも悲し相な、陰氣で、淋しい、不愉快極まる顏である。

## ▲太陽を罵る

或日の事、彼は突然庭に下りたつて、仰いで太陽を睨めつけて口穢く罵つた。

『世の中にお前の光線ほど難有てえものはねえ。泥棒、藝者、女郎、淫賣乃至梟の類は兎に角、萬物は皆お前の光線を喜んでゐやがる。お前が遠く東海の水平線上に顏を出し初めると、世間の有象無象が悉く之を合圖に一齊に活動し

ぺらんめえ

初める。一度お前の光線が地球を照らし出すと、百鬼夜行の圖は忽ちにして卷かれて了う。ペスト、肺病、腸窒扶斯、虎列拉等凡て人獸の生命を害すべき黴菌といふ黴菌は、皆お前の光線によつて瞬く間に照殺され了う。年中藥を絶やさねえ病身者でも、お前の光線が照りつけて居る處に働きて居さへすれや、病氣が忽ちに平癒つ了う。醫者が匙を投た重患もお前の光線の利用如何によつては紙を剝ぐ樣に平癒する、お前の光線ほど世の中に難有てえものはねえ。』

『けれどもだ、お前だつて然うは意張つて宇宙の大道は通れまいて。お前の光線にも矢張り俺と同樣裏と表があるから厭になつ了う。第一にだ、しばらくお前の光線に照りつけられてると、日射病が起る、腦充血が起る、矛盾ではあるめえか、第二に、お前の光線ほど公平なものは世界に二つとねえ。王侯貴人の住むてふ宮殿樓閣でも、乃至は其日暮らしの賤が伏家でもお前の光線は其間に何等の差別を立てねえで、日麗と射し込む。併し地球には北極と云ふ處がある、お前の光線は不公平にも此北極には恩惠を施して居ねえ。北極に生れた人間だつて、何も初めから北極に生れてえと願つて生れた譯でもあるめえに、お前の光線は其處を照らさねえぢやねえか。不公平だ、不埒極まる、非常な矛盾だ。第三にお前は太陽系統中最大のマッスだ、最大强力者だ。最大權力者だ。總ての惑星は皆お前に賴つて居るんだ。總ての惑星はお前の牽引力によつて今日の地位を保つて居るんだお前が一度憤怒すれば、諸々の惑星は木葉微塵……ぢやねえ、火になつ了う、煙になつ了う。お前は太陽系統中これほどまでの大威力を有つて居ながら、多寡が知れた地球の家來の月に光線を妨げられて、時々日蝕なんて、ケチ臭え病氣に罹るぢやねえか。地球に棲んでる生物から見れや、これも一大矛盾だ。やーい。』

頓狂なる胴魔聲が四隣に響き亙つたので、近所の內儀達は何事が起つたかと相率ひて垣根から內の樣子を覗きに來た。

感情が激して來たので、べらんめえは最早理屈を述べる餘裕がなくなつた。

『何だ、ソレナに眼をくる〳〵壓はさなくても可いぢやねえか、どれ程お前が威張つたつて駄目さ、矛盾だ。大矛盾だ。コンナ大矛盾のある太陽などはちつとも難有かねえ、俺は今月限りお前に對して尊敬の念を拂ふことを止にする。馬鹿野郎！』

大喝一聲！までの元氣はよかつたが、赫燿する太陽の光線を久しい間睨めつけて居たので、べらんめえは眼が眩んで脆くも其處にも打仆れて了つた。

家人が此有樣に吃驚して、水を吹きかけて呼び生けたので、べらんめえは程經て漸く呼吸を吹き返へしたが、すつくと立ち起がるや否や、物をも云はず、偶と家を飛び出して、何處とも知らず、世界を歩き出した。

## ▲遊戯の矛盾

べらんめえは夢現に我家を飛び出して何處とも判ず歩を進めたが、偶と小供の笑聲が耳に入つたので、立ち止つた。

『君、彼老爺の顏を見給へ、顏が二つあるぢやないか』

一人の小供がべらんめえのヤヌスの頭を見て笑ひ轉げた。

『事實だよ二つあるな』

と他の一人が怪訝顏でべらんめえの顏を覗き込んだ。

『オホホホ……此伯父樣は莞爾笑つてゝよ、氣味が惡いわ』

と今度は女の子が笑つた。すると、べらんめえの後に立つて居た今一人の女の子が。

『嘘、コンナに可恐い顏をしてよ』

と打消した。

べらんめえは小供をして一時此等の嘲笑を擅にせしめて居たが、躺て、襟を正して、肅然たる語調いと嚴に說教し初めた。

『坊つちやんや御孃さん方、今此伯父さんが云ふことを能く御聞き、あなた方は今此に斯うして面白おかしく遊んでゐらつしやるですが、遊戯に夢中になりますと時間を忘れます、歸る時を忘れて了ひます、瞬く中に日が暮れて了ひます、すると、父樣や母樣が我家の坊やは何をして居る、我家の孃やは何處へ往つて居る、コンナにトップリ日が暮れて了つたのに、まだ歸つて來ない處を見ると電車に引かれたのではないか、馬車に引かれたのではないか、夫とも溝へ墜落つたのではないかと、非常に御心配をなされます。而して心配の揚句が一家總出になつて、夫々手を分て坊つちやんやお孃さんをお探しに出られます。』

べらんめえも小供に對しては、べらんめえ言葉が使へぬと見える。

『これは非常な場合でござりますが、然うでないにした處が、女中さんがあなた方を御迎ひに來ます、坊つちやんやお孃さんは實の處尙未遊んで居たいでせうけれとも御迎ひが來たので名殘惜しくも家へ御歸りになる。すると、父樣や母樣が苦い〳〵顏をなされて、お前達はコンナに日の暮れるまで何處に何をして遊んで居た、怪我でもしては居ないかと、夫は〳〵心配たらなかつた、以後は成りたけ、日が暮れない內に早くお歸りとお叱りになります、又お孃樣方ならば女といふものは、夜は戸外へ出ぬものだ。日が暮れ相になつたら直ぐ歸るものです兎角女と云ふものは間違ひがあるものだから、小供の時から能く此邊のことを心得て置かないと、萬一のことがあつては取り返しがつかないと叱られます、其時になりますと、坊つちやんやお孃樣が遊戯に時を忘れて、其樣に嬉れしく莞爾してゐらつしやる其顏が瞬く間に悲しい泣顏になつて了ひます、今のあなた方の顏は伯父さんの此貌で、父樣や母樣に叱られた時の貌は伯父さんの此貌です』

べらんめえはぐるりと後向になつた。

『やあ、可笑いな、恰好手品師のやうだ』

『オホホ……眞實に可笑くつてよ』

小供は一齊に聲を放つて笑つた。

べらんめえは尙も眞面目である。

『小供と云ふものは元來が遊びたがるものだ、遊べば遊戯に耽けるのは當然の事だ。小供の遊戯には何等の干渉をしないで、隨意に放棄つて置ねばならぬ、でなくば病身者になる、父樣や母樣もコンナ事は固より御存知の筈だ、夫に少しでも御歸りが遲くなりますと、お叱りなされる、何と可笑いではありませぬか』

べらんめえはかく獨語ちて、ぐるり後向になつて、いとゞ想ひに沈んで居るらしかつたが、少焉ありて前向になる途端『これが矛盾といふものだ』と云つて『アハハハ……』と大笑し『否コンナ難しいことを坊つちやんやお孃さん達に申し上げるのではなかつた、伯父さんが餘りに取越苦勞をするものですから……つい其……小供にまでコンナ難しい理屈を……これも矛盾だ、アハハ……』と云つて歩き出した。

『やーい、態を見ろい、其後向の貌つたらないよ』

『アハハハ……』

『オホホホ……』

一團の小供はべらんめえの後姿を見送つて、思ひ〳〵に笑ひ轉げた。

## ▲電氣の矛盾

べらんめえは青山の通へ出て、何處へ行くと云ふ目的もなく、折から來かゝる築地兩國行の電車に飛び乘つた。

彼は少時電車の皮にぶら下つて車内の樣子を窺ふに、乘客は悉く此異樣な彼の扮裝に少からず驚いて目を側てた。愚なるはくす〳〵と笑ひ出し、賢なるは思慮あり氣にぱち〳〵と目を瞬いた。

べらんめえは愚なるを尻目にかけつゝ賢なる者の隣席に座を占めて。而して、

『ねえ、君、愚昧な奴等は、宇宙の矛盾、人生の矛盾などゝ云ふ事に一向氣が注かぬから憐れなものさね』

突然話しかけられたので、賢なるは驚いて其思慮あり氣なる目を益々ぱちつかせ

『えつ』

と二の句がつけなかつた。

『夫ぢや君達も宇宙の矛盾、人生の矛盾と云ふ事に氣が注かぬと見えるね』

と彼は尤といはんばかりに、一人合點をした。

『夫では少しばかり説教をしなくてはならねえ、近い話が此電車だ、電車は御存知の通り電氣を應用したもんだ』

彼は四邊憚からず、頓狂聲を振しぼつて滔々と語り出した。賢なるは肩越しに彼の貌を瞥見して、迷惑相に其目をあらぬ方に反した。

『處がだ、其電氣と云ふ奴が一體矛盾極まつて居る、自在に空中を飛行して居る時は、轟々たる雷鳴を伴つて先づ人の魂を消す、夫が落ちて來ると樹木を割き、家屋を破り、人畜を殺す、恐るべく又有害なるものである、夫が一度人間の手に囚れると非常に重寶なるものとなる、否、なるのではなくてさせらるのかも知れぬが、兎に角主觀的から見れば有害なものが一變して有利なものとなる電信電話電車等の交通機關が今日のやうに發達して來たのも皆其結果だ、蒸汽車などが轟々長い箱を引ずつてのろ〳〵走つて居る圖などは何時の間にか時代後れとなつ了つた、御老體御苦勞樣と云ひたくなるほど陳臭くなつ了つた、夫から諸會社の工場の動力、これなども、何にも町の眞中で石炭を焚いて、人の生命を縮める樣な頓間な事をするにや及ばねえ。遠地の河川瀑布などの水力を用ふるとか、或は石炭を掘り出す處で其石炭を悉く焚いて了つて其力を一條

の綱線で導いて來さへすれば、立派に仕事が出來るとなつた、水力を應用する場合は勿論だが、石炭を用ひて電氣を起す場合でも石炭を掘り出した處で其石炭を焚いて了へば、これを御苦勞樣にも態々遠地の市街へ運搬する時間と費用とを節約することが出來て實に經濟的である。電燈も其通りで燃料は材木、油、瓦斯、電燈と變遷して來たのが進化の順序である。此等の事は吾輩が今茲でくどくしく說敎しねえでも、君達は先刻承知の事である』

『處がだ、夫には又夫相應の弊害がありさ、これほどまでに厚生利用……否厚生利用ぢやねえ、利用ばかりで厚生と云ふ點は少ねえ、然り、電氣はこれほどまでに利用されて居るにも拘らずだ、これが爲に年々人命を損ふこと實に若干なるを知らずである、これを工場に利用しては職工の怪我と無殘な最期、これを交通機關に利用しては夥多の轢死者を出して居るではねえか。成程此等の不幸なる人間は一部の犧牲であつて、此犧牲あるが爲に多數の人間が大ひに助つて居るかのも知んねえ、所謂多數者の幸福を目的とする社會經營論から云へば已むを得ない結果であるかも知んねえ、否已むを得ねえ結果であるに相違ねえ、併し矛盾だ、電氣と云ふ奴は惡人のやうな面付をして居るかと思ふと案外に善人だ、善人のやうな面付をして居るかと思ふと案外に惡人だ、異體の判らぬ代物だ。成程電氣と云ふ奴其物は皆同じで、其力の表はれる形に差別があると云へば然うかも知んねえ、否、然うだ、然うに違ねえ、併し矛盾だ、電刑を用ひて人を殺すに至つては愈々以て其意を得ぬ、成程電刑はこれを用ひて以て社會の生存に危害を及ぼす惡人、犯人を除くのであるから、矢張一種の厚生で薄生でねえかも知れぬ、併し矛盾だ、間接の利害は兎に角、直接の結果は厚生と云ふ意義に反して居る』

『矛盾だ、矛盾だ』と頓間聲を張り上げて絕叫したので、先刻より此有樣を凝視して居た、車掌が俄に傍へ來て

『貴方最う少しお靜にして下さい』とべらんめえに注意した。

此時彼はぐるりと後向になつて、而して

『人間も矢張り此通りだ』

と云つて潸々と泣き出した。

## ▲藝者の才盾（上）

べらんめえは、『お靜かに』と車掌から注意されたのを、キツカケに、赤坂見附で電車を飛び降りた、飛び降りたは可いが偖何處を目的と云ふこともないので、飄々溜池方面に向つて足を運んだが、思ひ出したやうに、唯ある待合の前に止まつて、格子戸をガラ〳〵と開けた。

物の一時間も經つたと思ふ頃には、彼は既うへゞレケに醉つて居た。而して五六人の藝者を集めて、例の他愛もなく大氣焰を吐いて居た。

『何？　先方は素人ですものと。馬鹿を云へ。一體手前達は自分を輕んずるから人にも輕んじられるんだ。夫れ人自ら侮つて、而して後人之を侮るだ。世間の奴等だつて、判らねえにも程がある。特に世間の女と來た日にや、カラ話にやならねえ。何かと云ふと、直ぐ二言目には藝者だ。藝者を犬や猫のやうに心得てゐやがる。俺は夫が癪に障つてならねえ。手前達は尙更の事だらう。其處で俺は今手前達の爲に、こゝに大氣焰を吐いてやるから、神妙に聞きねえ』

先づ第一にだ、世の中は睾丸切牛や、よぼ〳〵牛ばかりの世間ではねえ、其處で性慾と云ふ厄介な問題が起つて來る。此性慾もだ、先祖代々から傳はり來つて、法律が認めて以て正當の婚姻とした關係に由つて滿足が出來れば、兎に角だが、多數の者は然う甘く型に嵌るものぢやねえ、獨身者は無論の事、嘸のある野郎だつて、然う何時も〳〵同じいものを食つてる譯には往かねえ、偶には七味唐辛のやうなピリ〳〵ッとした刺戟物をも欲しくならうと云ふもんだ、腹が太くなれや、而して其上にすゝめられや、刺戟物がなくては物は食へねえ。

夫に隣のじんたで自分の處で拵へたものは、非常に甘いものでなくちや食へねえもんだが、夫が他所からの到來物とか、他所へ往つて食うとなると、家では箸もつけねえものまでも、頬張るやうになるのが人情だ。また女には月々生理的の故障がある。姙娠すれや尙更の事つた。此生理的の故障を尊敬せぬ、自然の罪人ならば、兎に角だが、此故障を尊敬する以上は、男子の性質上、何處かに性慾の漏れ口がなくてはならねえ。獨身者に至つては特に然りとすだ』

『さて此性慾の漏れ口を如何なる邊に於て見出して可いかと云ふと、夫は藝者や女郎と云ふ一種の社會的制度に於て見出すのが最も安全だ。若し此漏れ口を素人に於て見出さんか、夫こそ大變だ、輕い所が私通で、却つて世の噂共の角を伸ばさせるばかりだし、重い所は姦通で法律上の罪人になる、して見ると、世間の奴等特に女共が藝者や女郎を犬猫同然に云ふけれども、實はこれに向つて大々的感謝の意を表さねばなんねえと、俺は思ふんだ。藝者や女郎は譬へて見れば、滔々たる濁流を此處で堰止めてる堤防のやうなものなんだ。世間の婦人をして其節操を維持せしめ得べく、自分は其犧牲となつて、一生を終る、實に憐れむべく又尊むべきものである。

『近い話が、信州に木曾と云ふ所がある、俺等はまだ其處へ往つては見ねえが其木曾の風俗つたらない相だ。婦人の節操と云ふものは、桃を割つて石を搜すやうなもんだと云ふことだ。此奴は其木曾に濁流を堰ぎ止める堤防がねえからだ、婦人の節操を維持せしめ得べく、婦人の犧牲になる藝者や女郎がねえからだ、近頃其福島と云ふ處に遊廓を拵へようてえ說がある相だが、之は至極尤もな計畫だ』

『以上は性慾の點から論じたのだが、社會の交際上から論じてもだ、今の處日本の婦人が交際場裡に打つて出て、男子の胸をむかつかせずに、杯盤の間を斡旋することが出來るかと云ふと夫は絶望だ。日本の風俗が一變して西洋流にな

らなければ、殆んど絶望だ。而して俺等の婦人に對する考が一變しねえ以上は藝者のまねをする女にや閉口だ。此點から見ても、藝者はなくてはならねえもんだ。少くとも俺等には重寶なもんだ。然う沒義道に藝者々々とけなすもんぢやねえ、藝者は俺等が過渡時代の犧牲なんだ。憐れむべくして又尊むべきものである。

## ▲藝者の矛盾（下）

『まつたくだわね』

『眞實に妾等は犧牲なのよ』

と並み居る藝者は互に顏を見合はせて、異口同音に莞爾した。

べらんめえは此時滿々と酌がれた盃をグッと飲み干しながら

『だが、之は藝者の一面觀に過ぎねえ、之からが藝者の惡口だ、惡口に馴れてる手前達だから、神妙に聞きねえ』と云つて、ヤヌスの頭をぐる〳〵と廻はした。

『これは誰でも云ふことだが、一體藝者と云ふ字が、俺等の氣に食はねえ。當節の藝者に抑も藝の出來る奴があるかえ。多寡が知れた三味線にした所が、ボツン〳〵と彈ければ豪いもんだ、大概は皆菊人形のやうに、呆然と膝に手をついたまゝ、目をぱちくりさせてるばかりだ。夫で藝者かと思ふと呆れ返へつて物が云はれねえ』。

『何？藝者だつて古の藝者と違ひますと。成ほど藝者にもエボリューションはあるさ。今日の藝者は今日の社會に適應して存在してるんだから、夫に古の藝者の眞似をせよつてことは、無理な註文かも知れねえが、せめてはそれハイカラがつて云へば、表情術さ、其表情術の一も考へて居ねえで、御客の御機嫌を取らうと云ふんだから驚くぢやねえか、アラまあにも仰いよにも千通は確にある、アラまあ仰いよと横町の婆さんの樣に齒のねえ口をもぐ〳〵させぬ

だけの表情も一種の表情だし、アラまあ仰いよと横目にかけて痛い程膝を抓ねるのも一種の表情だ、然るに此節の藝者てえものには、顔の筋一筋だつて動かさねえ奴が澤山ある、所謂團子坂の菊人形其儘の奴が多い、夫で以て交際社會に押出さうてえんだから隨分押が強いや』

『幸田露伴だつたと思つてる、一力のおかるの言葉を評してかう云つてる、アレが『若し風に吹かせて居たわいな』ならば全然松の木のやうに思はれるが、『風に吹かれて居たわいな』と來るから風に柳の纖弱したところが想像されると、かう云つてる、成ほど此奴は理屈ぢやねえか、一寸の言葉の端でも注意しなければ所謂山で蹴つころがした松の木どつこのやうになつちまうんだ、當節の藝者におかるのやうな用意周到な奴が居るか如何か、夫が問題ぢやねえか』

『何？其代に腹藝つてものを知つてると、腹藝だつて澤山あら、其道のことを心得ねえ奴に、ソンナ藝當が出來るもんか、精々の所が、機未だ熟せざるのにくだらねえまねをして、果ては僞善家だと値切られる位が落だらうよ』

『併し其腹で思ひ出した、女の腹は經濟學上から見た土地と同じた。何でも積載力がありさへすれば、ズン〳〵と値段が高くならうと云んだから驚くだらうぢやねえか、其土地が肥へて居やうが、痩せて居やうが、ソンナ事にはお拘ひなしさ。人口增殖の結果何でも人間を載せる力がありさへすれば、資本を投下するなんぞは愚の極だ、放棄つて置けば夫でズン〳〵値が出てくるんだから、豪勢ぢやねえか、だから、藝の素養があらうが、なからうが、顔がよからうが惡るからうが、ソンナ事には頓著なく、只器械さへ具へて居れば、夫で以て大膽にも藝者にならうてえ奴が年々殖へて來るばかりだ。其處で藝者の値打が年年に減つて來るのは無理もねえ。需要供給の原則だ。而して例の貨幣論上グレシヤムの法則によつて。惡錢よく良錢を逐うと雖も、良錢遂に惡錢を逐うことと能はずと云ふことになる、何と嘆はしい次第ではねえか』

並み居る藝者は此に至つて何の事か判らなくなつて來たと見へて、中には欠伸をし出したものもあつた。

べらんめえは唯例のヤヌスの頭をぐる〳〵廻はして

『矛盾！大矛盾！』

と叫んだかと思ふと、ついと待合を飛び出した。

## ▲議會の矛盾（上）

べらんめえは赤坂の待合を飛び出して何處ともなく歩いて居ると、自然と帝國議會の門前に足を止められた。

衆議院では、今日は某少數黨から、政府の彈劾決議案が提出されると云ふので門前には傍聽人が市を爲して居た。彼は之が爲に議會の門前に足を止められたのである。

べらんめえは知人に代議士があるのを思ひ出して、其知人から傍聽券を一枚貰つて、押すな〳〵で人波と共に衆議院の傍聽席に流れ込んだ。

併し彼は失望した。

議事が進んで愈々彈劾決議案と云ふ段取になり、議長が某少數黨の領袖を登壇すべく麾くと、政府委員席から、風采の揚がらぬ小男が、餡麺麭の樣にコロ〳〵轉つて出て、天下の大事を議するに、あらう事か、祕密會を要求したので、傍聽人の立腹と騒擾たらなかつた。コンナ時には持て來いのべらんめえ！直に椅子から衝立つて

『諸君！實に矛盾ぢやねえか、實に大矛盾だ、元來議會は輿論の府……』

頓狂な聲を絞り出して絶叫したので、階下の議員共も一齊に傍聽席を仰ぎ見た。傍聽人中には『ヒヤ〳〵』と手を拍つたものもあつた。

すると守衛が來て、有無を云はせず、べらんめえの襟頭を引攫んで、場外へ引摺り出して了つた。

傍聽人は控席に雪崩を打つて、口々に政府と某大政黨の無法を罵つて居た、中には足を踏み鳴らして、之に和した彌次馬も二三人あつた。

べらんめえは悵然として、少時此樣を凝視して居たが、堪へ切れなくなつて例の顚狂聲を振り上げて

『諸君！』

と絶叫した。傍聽人の視線は此時一齊に彼の上に注がれた。

『諸君！實に矛盾ぢやねえか、實に大矛盾だ、一體議會は輿論の府ぢやねえか、輿論を鬪はす處だ、輿論を鬪はすに、祕密も絲瓜もあつたもんぢやねえ、祕密にするなら、當初つから輿論を鬪はす必要は斷じてねえ、隨つて輿論を鬪はす議會てえものも斷じて必要がないんだ』

『何！事皇室の尊嚴に關すと？皇室の尊嚴に鬪するから、猶更の事俺等は祕密にしては可かぬと云ふんだ、恐れ多くも日本の皇室は外國の皇室とは違ふ、日本は君主政體と云つても、西洋の君主政體のやうに君主と皇室とが離れぐになるやうな脆いもんぢやねえ、君主と皇室とは一にして二ならず、二にして一なりと云ふのが日本の國體だ、だから憲法にも日本は萬世一系の天皇之を統治すと有ぢやねえか、日本の國體、日本の國家てえ觀念を明にするには、所謂大義名分を明にしなければなんねえ、之を明にしなければ日本は名有て實なしだ、日本てえ國は全然ねえと一般だ、西洋のやうに臨機應變の處置で以て變つて堪るもんか、いべら棒奴』

『皇室に關する國民の觀念が有耶無耶になつちまつちや、日本國は亡びつちまう。だから南北正閏論のやうな、國體の根本問題は人民に公開の府たる議會に於て、正々堂々と論じなければなんねえ、皇室の尊嚴はこれに由つて愈々益々明になるんだ、夫を祕密會になるなんぞは實に怪しからぬ事つた、夫れこそ却つて皇室の尊嚴を掩ふと云ふもんだ』

『政府も政府だし政黨も政黨だ、コンナに一目瞭然たる關係を見わけることが出來ないで、俺等と最も密接の關係ある、又俺等と最も親密の關係ある皇統論を祕密に附するなんぞは、不法極る所か、實に不忠の甚しきものだ、國體の根本たる事實の討論質問を秘密に附するのは、國を愛せざぬの甚しきものだ、隨つて君に忠ならざるの甚しきものぢやねえか』

## ▲議會の矛盾（下）

『第一祕密と云つたつて、其祕密が守れるか如何かゞ問題だ、昔から祕密の守られた祕密と、眞晝中の化物には、餘り出會した覺がねえ、新聞紙と云ふ飛耳張目の狡い奴が居るうちは、議會がイクラ祕密を守らうとしたつて、素破拔くから詮方がねえ、かう見ねえ、今日の祕密會だつて、明日の新聞には、屹度一伍一什が詳しく素破拔かれてるから……』

べらんめえは此で一息ついた。而して例のヤヌスの頭をぐるゝと廻はして居たが、やがて眼をしばたゝきつゝ、咳一咳して語り出した。

『議會の矛盾はこれればかりぢやねえ、之はホンの一例に過ぎねえんだ、一體議會も此頃は餘程進化して來た、進化して來たと云ふと、進歩して來たやうに思はれるが、然うぢやねえ、所謂英語のエヴオルヴして來たと云ふんだ、エヴオリユーションの中には退化も入つてる』

『然うだ、或は退化したのかも知んねえ。議會創始まりの歴史を云ふと餘り長くなるから止すがだ、立法と云つたつて、當節のやうに急がしい、くるゝ目の廻るやうな世の中となつちや、イクラ代議士樣々だつて、八ッ手の觀音ぢやあるめえし、然う隅から隅まで政治や、法律の事に手が屆かう筈がねえ。其處で立法は如何しても其局に當つても官吏ぢやなくて、一寸編み出し兼ねると云ふもんだ、尤も代議士だつて政治に熱心でありさへすれば、法律案の起草位は朝飯前の事だらう、けれど夫がさ、唯歳費に有りつくだけを榮譽としてる當節

の代議士だもの、ソンナ心掛のある奴は鐵の草鞋を穿いて探したつて、發見りやしねえ、其處で憲法には議會自身も法律案を提出する權能を十分に有してるんだが、其權能はあつても資格がねえから、情ねえ事にや夫が出來ねえ。だから法律案てえと大概は政府が提出する』

『其政府の提案をまあ審議討論するてえのか議會の役目と云ふもんだが、既に法律案を提出する資格のねえ代議士が、如何して法律案を審論討論する知識があるもんか、之が大矛盾だ』

『今日の議會の形勢から云ふと、卽ち議會のエヴオリユーションの上から云ふとだ、立法の府は既う立法の府でなくて、政府を監督すると云ふ名義に於て、漸く其生命を維持してるんだ、たとへば藩閥政府が藩閥の利益のみを謀つて、國民の利害休戚を眼中に置かねえことがあつては大變だと云ふんで、夫を監督するのが議會の役目だ、職分だ、今日は法治國であるから、政府の如何なる施設でも、必ず法律案の形を備へるか、豫算案の形を備へて、議會に協贊を求めることになつてる、若くは承諾を求めることゝなつてる、其協贊や承諾を求められる場合に不法や不當な點があれば、ドツコイ然は可けねえてんで、之を拒むのが政府の監督てえもんだ、監督も此意味に於てこそ意味があり、議會も此監督をしてこそ初めて其意味があり、生命があるんだ』

『然るに、如何でえ、今日の議會は、羽織ゴロだつて鄕黨に爪彈をされてる代議士樣々の無學文盲の事は、暫時許して不問に附して置いてもさ、身體に暖けえ血がめぐつてる以上はだ、政府の措置の善惡や其措置が延いて國民の頭上におつ懸つて來る利害關係なんかは判り相なものぢやねえか、夫が判らねえで、何でも權勢に近づけば可つてえ量見で、盜泉の水を飲むなんざ、呆れ返つて物が言はれねえ』

『偶には少數黨てえものがあつて、政府に食つてかゝつて見たところがさ、多

數に無勢、敵はねえと見れや、誰だつて傘屋の丁稚になるもんか、馬鹿を見るよりも遊んでる方が可いと、斯う云ふことになる、夫で以て國民の選良とは實に恐れ入谷の鬼子母神だ』

祕密會の宣告に少からず、不平を抱いて騷いで居た傍聽人は、べらんめえの演說を聞いて、一齊にヒヤ〳〵と拍手喝采した。衆議院の屋根は此時の此騷で彼處此處に龜裂が入つた。

べらんめえは衆人の騷を後に、悠然として議會の門を出た。而して飄々乎として、何處とも知らず、足を運んだ。

## ▲新聞記者となる

べらんめえは衆人の騷を後に、悠々として議會の門を出で飄々として何處ともなく、足を運んで居ると、京橋の唯ある新聞社の前に立つた。其處で思ひ出したやうに斯う考へた。

『何だ馬鹿々々しい、斯うして說敎して歩いたつて限がねえ、第一新聞紙と云ふ人間の思想を傳へるには持つて來いてえものがあるにも拘らずさ。飄然漫遊するもねえもんだ、新聞の上で飄然漫遊した方がどれほど氣が利いてるか知れやしねえ、此奴あ新聞說敎に限るッ』

とッカ〳〵其新聞社の受附へ名刺をを出して社長に面會を申込んだ。

流石は新聞社の社長だけに、彼は見ず知らずのべらんめえを應接室へ通した。べらんめえは入社の志願を述べた。

何處に何と云ふ處はないが、べらんめえのヤヌスの頭が社長の氣に入つた。コンナ人間は廣い編輯局に一人はあつても可いと云ので早速入社を承諾した。

べらんめえは夫から筆の說敎者と身を變へて、先づ現代の政治を罵倒した、相撲を罵倒した、商法の改正案に鬪して神田の伯母さんを罵倒した。犯人狀者を罵倒した。萬引を罵倒した。事大主義に對する政治家の迂愚を罵倒した。英

國の自由貿易主義を罵倒した。現代人の疲勞を罵倒した、現代人の婚姻を罵倒した。併し之が爲に怒つたものはなかつた。怒つたものがあつたかも知れぬが表面には現はれて來なかつた。却つて諸方面からやれ〳〵と煽動を受けたばかりであつた。併し現代人の文藝を何處が面白いと罵倒したときは手でたへがあつた。具體的に一々例を擧げて論じたものだから、其槍玉にあげられた人間が非常に怒つた。怒るのも無理はない。一體人間と云ふものは、人の惡口は好くものだが、自分の惡口を好くものではない。矛盾だけれども詮方がない。其處はべらんめえの矛盾と同一だ。

槍玉にあげられた人間は、夫から後陰に陽に復仇を企てた。同じくべらんめえを槍玉にあげて、口を極めて罵つた。併し其罵り方はべらんめえの罵りには及ばなかつた。猛烈ではなかつた。感情的の罵倒で、理論を根據として居る罵倒ではなかつた。終には同じ新聞紙に連載された『危險なる洋書』もべらんめえの筆だと云ひ傳へた。其筆者が先覺からお目玉を頂戴したから之で擱筆すると洒落て出たのを、其洒落が判らないで、本氣に縮み上つて止めたものだと思つた。笑止なことである。

夫からべらんめえは或事情があつて、長野市の或新聞の主筆となつて赴任した。併しヤヌスの頭は生れ變るか切つて了はない以上は矢張りヤヌスの頭だ。社説では新聞記者の自覺を論じた。べらんめえ欄では師範學校の風紀問題に關して性慾論を振り廻はした。矛盾だ。矛盾は矛盾であるけれど、夫は已むを得ない矛盾だ。人間の生活が矛盾して居る以上はべらんめえの思想も矛盾して居る。第一新聞紙の態度が矛盾して居る。矛盾すべく餘儀なくされて居るのだ。矛盾と云ふよりも進化と云つた方が可いかも知れぬ。世間には此所の所に氣の注かぬ人間が多い。其處でべらんめえは、又復次のやうに啖呵を切つた。

べらんめえ

『何、此節の新聞は家庭に入れられないつて、コンナ世迷言は道學先生や、學者などが往々にして唱ふる議論で、俺等も行く先々で大抵此世迷言を聞かされるから往生だ、併し此議論に對しては一言を以て答へることが出來る、曰く新聞は家庭の爲に作つてるものぢやねえ』

『何、此節の新聞は墮落したと、之は眞理だ、併し墮落したつて詮方がねえ、墮落するのが當然だから詮方がないさ、これには教育の普及が與つて大に力あるんだから、夫が可かなければ普通教育を止めにするより外にねえ、十年以前には第一字を讀める奴が非常に少なつかた。所謂曉天の星だつた。で、新聞を買つて讀む人間は數へるほどしかなかつた、而して其字を讀む人間は大抵此節の中學校以上を卒業した位の知識を十分に備へて居た、だから買手に賣手、賣手に買手で、新聞は然う讀者の機嫌を取らなくても濟んだ、況や戀れた戀れぬの、强姦騷の、私通騷とのソンナ穢ねえ記事はテンデ載けなくたつて可かつたんだ、可かつたんだ所ぢやねえ、ソンナ記事を載けると却つて讀者から大眼玉を頂戴したもんだ、現に昔の『日本新聞』が然うだつた、此節では當時の『日本新聞』のやうな新聞は見たくても見られなくなつた、アンナ眞似をして居やうもんなら、新聞の生存競爭場裡忽にして淘汰されつちまうのは知れた事た』

『教育の普及々難有てえが、新聞の歴史から見れば却つて難有くねえ點もある。此節では猫だつて杓子だつて字を讀む字を讀むから新聞を讀む、趣味の低い、知識の淺い讀者を相手にするんだから、夫相應に新聞も墮落せぬ譯には往かねえ。其代此節の新聞は立派な商賣になつて來た、之で金を儲けるものが續續と諸方に現はれて來た、既に商賣となると御客樣をソッチ抜に獨よがりの御託も竝べては居られねえ、昔から人を見て法を說けてえことがある、此頃の新聞は人を見て法を說てるんだ、馬鹿野郎！』

『何、東京のべらんめえはコンナ不見識なべらんめえぢやなかつたと、見識が

あつて、コンナ矛盾だらけの現代に活きて居られるもんかい、だが此の矛盾の兩方面を見わけて、甘く世の中を渡つて往くのも、一の見識だ、新聞記者の自覺なんどと云ふ事は通り一遍の挨拶に過ぎねえ。併しドンナ家でも玄關てえものがある、床の間てえものがある、此玄關や床の間を飾るには、誰だつて豪ら相なことを云はなければなんねえ、人間は犬と兄弟だ、しかし俺は犬だと云ふ人間はありやしめえ』

『何、べらんめえは信州を馬鹿にしてると、馬鹿なことを云ふな、俺等の眼中には世界あり、宇宙ありさ、單に一地方の、大世界、大宇宙から見て、殆ど無限小な區劃に局限されて、夫を馬鹿にするやうな馬鹿な眞似はしねえ、俺等は現代の文明を馬鹿にしてるんだ、勘違をして貰ひますめえ』

『先達ても俺が新聞記者の自覺てえことを云ふと、小使錢をも有たねえ癖に、大法螺を吹きやがる、夫よりか官吏になつて居たら縣の事務官位になつてるだらうなんて云つて來た奴が居やがる、腰辨當と署名してあつたが、腰辨は腰辨だけの事を云ふと俺はほと〳〵感心した、金とか地位とかを無上の權威と心得て、人間の面白味、生活の面白味を知らねえ奴ほど世の中に取扱ひにくい奴はねえ、コンナ腰辨に限つて課長や事務官や知事の前へ出ると、腰がわな〳〵して立つて居られねえんだから可哀想だ』

『云ひたいことは山ほどある、食傷した樣に喉元まで突かけて居やがる、併し新聞は商賣だ、其商賣に免じて飄然漫遊の記は之で止める、併しべらんめえに此ヤヌスの頭がある以上は、餘り馬鹿々々しいことがあれば、何時でも飛んで出て罵倒する、然う心得ろ、ざまを見やがれ』

# 孤島の戀

## （一）

力山を拔き氣世を蓋ふと申しました項羽でも、時に利有ざれば馬も動かず、虞や虞や汝を如何にせんなどゝ泣きごとを申さねばなりませぬのが浮世で御座います。さても佛國の前皇帝奈破崙は、一千八百八十四年四月、歐洲列強の全權委員が花の巴里で調印をいたしました條約、又の名フオンテインブロウ條約といふ條約文の第三條によりまして、昨日の榮華を夢と諦め、一時は暗涙を呑んで地中海の一孤島エルバ島に配所の月を眺めなければならぬ、哀れ敢果ない身の上となりました。が、世の中に母の愛ほど尊いものは御座いませぬ、己が子愛しの一心から、女の身には聞くも恐ろしい楫枕、涙路を越えて漂泊ひ着きました母の愛。唯夫のみか奈破崙を慰むる唯一の愛でありました。ムリニーに



て開きますれば、命とまで惚れ込んで居たジョセフインの花は、三日見ぬ間に早くも散つて了ひますし、垣根の牡丹と愛でゝ居ました皇后も、今は何處とも知らぬ旅路の空、曇勝ちなるも道理では御座りませぬか。

皇帝は斯樣に皇后マーリー、ルイを憧れ慕うて居られましたにも拘らず、皇后は尙行かうか行まいかと心を決し兼て居られましたので、皇后の爲にと準備へてありましたボルト、フエライオの室も、空しく主人の來るを待兼ねて居許りでした。で、サンマルチノーの天井に描かれた畫工が苦心慘澹の筆の跡も戀の使とは何事ぞ。日に日に其鳩が奈翁を冷笑ふ樣に見えて來のでありました。

眞實皇帝は神かけてマーリー、ルイを愛して居られたのです。夫れも其の筈だ。マーリー、ルイが女心に浮世を知り初たのは全く奈翁の御蔭で御座います。皇后は皇帝が莞爾と微笑みて贈らるゝ金剛石の眩い光に、魂は拔殼の唯恍惚と目を細くして見入つて居られたので御座います。夫が又奈翁にとつては

此の上もない誇りなので御座いますから、奈翁は、何、木枯か、荒めば荒め、世には汝等が毒手の届かぬ室咲の名花があるぞと心の中で窃に自慢をして居られたのです。夫れにつけても此の室咲の名花を何とかしてエルバ島に移し植たい植たいで皇帝は夜の目も碌に合はされなかつたので御座います。奈翁は苟くも佛國の皇帝では御座いませぬか、夫れでも流石に故郷の家が懷かしかつたものと見えまする。母の愛ばかりでは何か物足らぬ心地がしたので御座いませう甘い〳〵蜜の樣な言語を交はす友達が欲しかつたので御座います。

皇帝は此の樣に皇后を戀慕して居られましたので、巴里條約に調印をいたされる時にも、責てはルイの爲にタスカニーを其の領土に貰つてやらう、少くともパルマとプラセンチアの外にルッカとピオムビノーとを貰つてやらうと苦心いたされたので御座います。が、歐洲列强は無情もこれを拒絶したので御座います。若しも此の請求通りいたしますると奈翁とルイとは一葦帶水を隔てるばかり近い所に居住することゝなりますので、妻君に逢ふ權利、權利といひまして絶えず皇帝が絶えず大陸に御旅行あつては夫こそ物騷千萬、虎を野に放つと同じである。皇帝と皇后との別居は特に墺太利が會議の折に提出した條件で御座います。

で、皇帝は皇后と同棲の事につき種々樣々の苦心をいたされたので御座います。其の一例は、エルバ島へ流竄の途中、ヂーン又はブリアルにて一行に落合つてくれれば、一所に手を携へて旅行し、御前は夫からパルマへ行き、自分は夫れからエルバへ行くといふことにしようじやないかと、皇后に申入れられた。すると、墺太利の皇帝が夫は可けない。パルマやプラセンチアは最近の戰爭で秩序が甚だ紊亂して居る。其處に相當の政府が設立せられなければ、危なくて皇后の行幸を仰ぐことが出來ぬと、故障を入れましたので、此の計略もおぢやんとなりました。其の上コルヴィサルといふ醫者が、エルバ島の氣候は暑いか

寒いか知りもせぬ癖に、『皇后の樣な健康ではエルバ島に御いでなされては大變で御座います、夫れよりか、サキソニーのエキス溫泉へ行つて御靜養なされた方が宜しう御座います』と、忠義顔して言上いたしましたので、皇帝は『否、拙者と一所に居るのがルイの健康の爲に最も可い、其の上エキスの樣な健康地は若干でも伊太利に在るではないか』と抗議を提出せられましたが、頑固一點張のコルヴイサルは、如何しても聞きませぬ『否、皇后の健康に適する地はエキスより外にはありませぬ』と主張いたしましたので奈翁もこゝに到頭我を折つて、孤影悄然としてエルバ島へやつてまゐつたので御座います。

（二）

奈翁はブオンテインブロウを出發いたしました日の前夜八時に、皇后に一通の手紙を贈つてコルヴイサルに宜敷と傳聲を賴んだのです。夫から翌日フオンテインブロウを出發いたします前にも亦復皇后に宛て一通の手紙を贈り、告別をいたしたので御座いますが、午前十時愈々馬の出發の用意を整ひ、荷物も主人待ち顔ち宮殿の前に竝んで居りまする時になつて、奈翁は外國の使節に『自分は如何しても エルバ島へ行くことが厭だ』とダヾを捏ねたので御座います。皇后と一所に行けぬことなら、條約の調印は取消す、讓位の沙汰も取消すと頑張つたので御座いますが、夫れも跡の祭で御座いました。

四月二十八日、愈々船が明日フレジユ港を拔錨せんといたしまする間際に、奈翁は又復皇后に宛てゝ手紙を贈りました。五月の九日にもボルト、フエライオから幸便を求めて、エルバ島の景色のよいことなども認めて、手紙を贈りました。其三日後にもベルトランを使にたてゝ、皇后が愈エキスへ出發する折には、パルマまで五十名の波蘭輕騎兵と一千頭の馬を出迎はすなどいふことを詳細書いて贈つたので御座います。

すると、五月二十五日に漸う佛國から皇后の手紙がエルバ島に著きました。

奈翁は取るも遲しと封とく〳〵讀んで見ますると何の事だ、夫れは四月二十六日の日附でプロヴインから出した手紙、心のありたけを書いて贈りました以上三通の手紙に對した返答の手紙では御座りませぬのでした。夫れのみか、此の手紙には忌々しいも忌々しいでは御座りませぬか。皇后はエキスへは行かないで、維納へ向つて出發するといふ由を認めてあつたのです。墺太利の維納！奈翁は恰好皇后を地獄へ旅立たせる樣な感がしたので御座います。夫れから後は皇后よりの報道も梨の礫で御座いました。

皇后よりは如何しても報道がないので六月の二十五日にベルトランが奈翁の意を承けてメネヴワルに、此の頃の樣に郵便の不規則なのは、如何した故か、返答をしろといふ詰問の手紙を贈つたので御座ります。其の故でもあつたで御座いませうか、二箇月の間梨の礫であつて三通の報道が、七月の初旬に至つて續け樣に奈翁の許に著きました。此の外に皇后は四通の手紙を奈翁に宛てゝ出した相ですが、夫れは其の筋の手で途中沒となつたので御座います。

待ちに待ち焦れた音信の手紙も開けて悔やしき玉手箱、皇后は五週間維納に滯在の後、同處を出發、パルマへ來るのではなくて、例のコルヴイサルの指金で、子供を伴れずにエキス溫泉を行くといふ、聞くも氣遣しい音信では御座いませぬか。

『子供も伴れずに』エキス溫泉行！、奈翁が卒倒する樣に驚いたのも無理は御座いませぬ。で、奈翁は卽日皇后に手紙を出して、エキスに行つては可かぬ夫れとも既に行つて居るなら、此手紙を見る次第エキスを出立せよといふ意を報ずると共に、エキスよりもダスカニーの溫泉へ行つた方が可い、鑛泉の性質もエキスとは寸毫も違つて居ないから、其處へ行け。第一タスカニーの溫泉ならパルマにも近い、隨つてエルバ島にも近いし、夫から子供も一所にゆる〳〵靜養が出來るといふ意を熱心に書き贈つたので御座います。例のコルヴイサル

が皇后の健康に適する地はエキスより外にはないと言つた時に、奈翁はタスカニーの溫泉もエキス同樣だといふことは、少しも氣が注かなかつたので御座います、其の上皇后をエキスに置くのは如何しても氣がかりでならぬ。と云ます のは、エキスには墺太利の軍隊が恐らくは居りませぬので、皇后を警衛する兵隊が居なければ皇后は道行く人にもあの〻この〻と後指をさ〻れる虞がありますが、タスカニーでは其樣な氣遣は寸毫もないので御座います。否、道行く人に後指をさ〻れることなどは寸毫も心配することは御座いません。夫よりも奈翁は日頃から東洋流に皇后を九重の雲深き所に閉ぢ籠めて、頻に外界の嵐を厭つて居たので、子供も伴れさせずに溫泉場などへやらうものなら、夫こそ大變、當世の輕薄風に馴染んで可愛い夫がエルバの孤島に待ちに待つて殆ど死に相になつて居ることを、オクビにも出さぬ樣になりはせぬかと、心配したので御座います。で、奈翁は此の由を手紙に認め、途中で盜まれぬ樣注意の上に注意を施して贈つたので御座いますが、返事の手紙は如何してもまゐりませぬ。

（三）

奈翁は、此の樣に戀ひ慕うて居るルイを傍近くに冊かせることが出來ないので、唯々孤獨の感を增す許りであつた。が、夫れよりも特に腹立しいのは、列强が自分を罪人取扱ひに輕蔑しきつて居ることで御座います。彼れは昨日まで歐洲列强を頤使して居た佛國の皇帝であつた。今日とても面積は狹いがエルバ島の王である。夫に何ぞや何等の交渉もしないで自分の妻を勝手氣儘彼方此方に動かすとは失敬極まるではないかと奈翁の怒の目に見る樣で御座いました。

遠からず皇后が到著すると布令出したので、島中が先日から奉迎の爲だとて、上を下へとの大混雜、數箇月の間準備いたしてあつたイルリユミーネーションも何時其の佳賓を照らす日が來るか判らないといふ有樣で御座いました。で、島民は委員を選んで、『何せ皇后の御到著が御遲い、我々は一刻も早く皇帝皇

后が打揃はれて御機嫌麗はしい顔が拜みたう御座います』などゝ言つて、日々奈翁の許へ其の理由を聞きに押かけるといふ始末、實に笑止千萬では御座りませぬか。夫や是れやの失望や腹立たしさで、流石の奈翁も半ば狂亂の體たらく從者の面前をも憚らず、時々聲を放つて泣き悲しまれた相で御座います。元來奈翁といふ人は平生から極めて芝居氣の勝つて人で御座いましたので、公衆の面前に於て、時々面白い狂言を書かれた相だ、或る時は箱の中から子供の寫眞を取り出して、穴のあくほど凝と見入られ、千萬遍も接吻をした揚句は『おゝ可愛い、可愛い、眞實に可愛つたらない』などゝ突如に大聲を放たれた事も御座いました相だ。

又或日の事、羅馬から送つて來たいろ〳〵な肖像畫帖を開いて夫に見とれて居られましたが、突然開く手を止めて『やあ、之はマーリー、ルイだ』と肩を聳やかされた、潮の如く湧き來る胸中の感情を堰き止め樣とせられたことがある、夫から熟々と皇后の肖像畫を凝視して居られたが、次に其の手に觸れたのが例の羅馬王。可愛い〳〵御自分の御子で御座いますから堪りませぬ、熱火の如き情を罩めて『おゝ我が子よ』と眩かれたのであります。奈翁の頭には二六時中子供の面影が往來して居つたので御座います。で、『我が子よ』と眩かれた其の折の眩きは、幽も幽、從者の耳に入らなかつたほどの幽な眩きでありましたので、從者どもは樣子如何にと息を殺して、奈翁の顏を見守つて居た相で御座います。

奈翁は夫として又父として、此樣に苦悶に苦悶を重ねて居るといふ芝居をして、天下の同情を惹かうと試みたので御座います。實に老獪な人間ではありませぬか。苦艱の中にも例の計算は何處々々迄も沈靜にやる。それが奈翁の特色で御座います。たとひ妻や子を呼び寄せることが出來なくとも、エルバ島を脫走するなどの氣色は。オクビにも出さないでいと靜に餘生を此の孤島に樂むと

いふ樣を見せて世間に油斷をさせたのであります。

（四）

が、月日の經つに隨つて皇后と相見ゆるの機會は益少くつて、今は唯一縷の望しかない樣に成ましたので御座います。皇后は維納に居らるゝよりもエキスに居らるゝ方が、兎も角も健康に適して居まするので、身體が快くなりさへすれば、パルマへ歸る途中、恐らくはエルバ島へ立寄るに相違ないと、奈翁は唯此一縷の望に命を繫いで居つたので御座います。が、八月十日、伊太利の商人に變裝した使者が齎して來た皇后よりの手紙によりますると、夫さへ今は望の綱を斷たれたので御座います。

で、八月の十五日には、尙未皇后が到著せられぬにも拘らず、一先やつて了へといふので、立派な祭禮を施行したので御座いますが。其祭禮には夜會、宴會などの催しがありまして、サン、マルチノーの競馬會には奈翁自身が出馬して、綠葉を以て裝飾せられた棧敷の上から優勝者に賞品を授與いたしました。其の翌日には工兵の催しに係る仕掛煙火などがありまして會場の入口には奈翁と皇后との肖像を掲げて祝意を表したので御座います。島民は何しろ九月には必定ルイが尋ねて來るといふ奈翁の約束を信じ切つて居て、如何に慘澹たる家庭の悲劇が其の間に演ぜられて居るかを知らなかつたですから、會場に掲げられてある奈翁と皇后との肖像を見て非常に喜んだのであります。處が夕刻になつて暴風が吹き出で、宴會もイルリユシネーションも滅茶滅茶になつて了つたと來ては緣起の惡いこと。夥しかつたで御座りませう。

皇后からは杳として此の樣に消息が絕えて居たものでしたから、奈翁も今は如何しても耐へ切れずなつたものと見えまして、事實皇后は自分の信じ且希望して居りまする如く、監督の目が繁くて手紙を寄すことが出來ないのであるか、若しさうであれば、萬難を排してもエルバ島へ逃げて來れば可し、夫れとも去

る者は日々に疎しと云世の諺に漏れないで、皇后は自分が想うて居る程自分を想うて居ないのかも知れぬから、今度は愈事實を突き止めようといふ考へを起したので御座います。で、八月二十日に、近衛の一大尉で皇后の侍女を女房として居るソルペーといふものが、女房に逢ひに行く爲一箇月の休暇をくれと申出たのを幸ひ、奈翁竊に此の大尉を呼び寄せて、其の女房の手を通じて皇后に近寄り、ゼノアを經てエルパ島へ落しくれないかといふことを賴んだので御座います。而して奈翁は此の大尉の運動に關し、四種の異方面から報道を得る手筈を整然と決めて居たので御座います。

かの八月の二十三日に奈翁がモント、マルシアナに旅行したのは、全く其爲で御座います。モント、マルシアナは噂に高い天下の名勝でありますので、奈翁はこゝに一時の敢果なき慰藉を求めたので御座いますが、夜に入りては輾轉反側、恐ろしい寂寞を感じましたので、月の二十八日にマドンナ、ヘルシテーヂから一通の手紙を皇后に宛てゝ送つたので御座います。而して其の返事が安全に奈翁の手許に届く樣にとて、宛名をセンノーといふ名前にし、コンスタンチノ、ガテリーといふ變名の下にゼノアを經て手紙を出せといふことを書き添へたので御座ります。昨日までも佛國皇帝で飛鳥も落す勢ひであつた奈翁がセンノーといふ僞名を用ひ、コンスタンチノ、ガテリーなどといふ名の下に隱れて手紙を往復せねばならぬ樣になりましたのは、餘所の見る目も氣の毒な次第では御座いませぬか。

（五）

九月の一二日頃で御座います、暮色が蒼然としてポルト、フエライオの港を罩めた時一隻の船舶が勢ひよく港へ入つてまゐりました、而して其の船は港務所の役人から停船を命ぜられないで、驀然に灣の彼方サン、ギオヴアンニに碇を下ろしました。唯見ると、其の船の甲板には一人の貴婦人と金緣の眼鏡をか

け正服を著けた脊の高い紳士を從へた貴婦人と子供とが逍遙して居るので御座います。そも此の貴婦人は果して何者で御座いませうか、此の婦人こそ奈翁が日頃から爾く一刻千秋の想ひで、其の來島を待ちに待つて居りました例の皇后マリー、ルイでありますか、但しは又他の情婦でもありますか、其の邊は未だ確とは判りませぬので御座いますが、何しろ大陸から遙々と此の島に奈翁を尋ねに來たものに相違は御座いませぬ。ベルトラン元帥は脫帽して此の婦人と話をいたして居ります、皇室の厩へ宛て命令が下りますと。直に二頭の馬と二頭の騾馬とをつけた一輛の車が港へ驅け著きました。而して此謎の樣なる婦人の一行は、やをら此車に乘つて、宮殿を見かけ勢ひよく驅け去つたので御座います。

甲板の上の水夫に就いて聞きますると、兎に角此の貴婦人は伊太利の海岸から此の船に乘つた相だ、或時は其伴つて居る子供を我子とも呼び、又或時は皇帝の子とも呼んで居た相ですから、此の貴婦人こそ確に皇后であらう。加之ならずチユーレリーに居りました馭者や別當より聞きますると、伴れて來ました子供の服は確に羅馬王の服裝であつたと、皆が證言いたしますので、此の貴婦人の皇后であることは少しも疑はない、唯一寸と變に思はれたのは、此の貴婦人の脊は皇后よりも少しく低かつた樣に見えましたが、夫は月夜に一寸垣間見た許りの話ですから當には成ませぬ。船の上でも陸でも此の貴婦人は其の伴つて來た子供に對して皇族の禮を拂つて居たのですから、的確皇后マリー、ルイに相違ない。其の上此の未知の貴婦人の乘用に宛てられた馬車馬の鞍は、日頃から皇后用の爲にと準備してあつた鞍であつたりした點より見ましても、此一行は皇后の行啓に相違ない。金緣眼鏡の脊高い紳士はユーゼン、ド、ボアルネー親王で、女は御附の侍女に相違ないといふので、島中の大混雜といつたらなかつたので御座います。

が、驚くなかれ。此の貴婦人は奈翁と島民とが爾く其の來島を待ち焦がれ居た皇后マリー、ルイではなくて奈翁の情婦ワレウスカといふ伯爵夫人であつたので御座います。

話は跡へ戻つて之から少しワレウスカ伯爵夫人の事に就いて御話をしなければならぬことになりました。

ワレウスカ伯爵夫人はなか〳〵の美人で御座いました、頭髪はブロンドで眼は綠色と……申すと日本人から見れば何處が美人と惡口を云人も御座いませうが、西洋人から見ればこれが美人の必須なる資格なので御座ります、柄は少しく小さいが、身體は小締とした可い女で、性質は快活と沈鬱とが混つて居て、時には大口を開いて笑ひ、時には首をうな垂れて物思ひに沈むこともあつた相で御座います。奈翁が此の女を見染めたのは千八百七年の春でワルシヤウで相會した時であります。當時ワレウスカは芳紀二十歳、西洋人から見ますればなほまだ赤子供であつたので御座いますが、既にドン、ルイ、ゴメッヅといふ嚴格な性質の老人に嫁いて居たのです。奈翁は此のワレウスカを垣間見るや、意馬心猿狂ひに狂つた揚句が、到頭例の慣用手段で或密會所へとワレウスカを誘ひ出したので御座います。

（六）

奈翁がワレウスカを口説きました時は、彼れが救世主として波蘭に侵入し一時は露國を打破つた姿であつたのみならず、普魯亞をも亦打潰した勢ひであります。したので威風堂々、一人で天下の權を握つて居た時で御座います。で、虛榮の夢に憧がれて居る婦人を口説くには最も都合の可い時であつたので御座います。が、驚くことには、伯爵夫人は四日の間、何とも返事をいたしませぬでした、通例でありますれば、母親が承知を致しませぬ、一度、奈翁が娘を近傍く冊せたいといふ望みを口へ出しますると、娘よりも先づ母親が大喜びに喜び

て一張羅に綺羅を飾らせて奈翁の許へ送り屆たので御座います。ですから、奈翁は此の無禮なる擧動に怒りもし驚きもし、又恥かしくも思つたのです。伯爵夫人の方では年齢も行かず乙女心にも、流石は行末を案じた者と見えまする。不義の富貴は浮べる雲、少しく風が吹き出づれば直に跡方もなく飛び散つて了ひ、秋の扇と捨てられては、啻に自分が捨てられるのみでない、夫も子供も併せて野山に捨て去らるゝの悲運に陷りはしないかと心配いたしたので御座います。が、ワレウスカは婦人の身に取りて、最も高價い〳〵讓歩をなさなければならぬ悲しい目に逢つたので御座います。國の爲……國を救ふ爲には、一時は身を賣られたところが詮方がない、熱涙を呑んで國家の犧牲に供せらるゝのも國民の尊い義務であるなどいふ理屈からして到頭奈翁に身を委すことゝなつたので御座います、ゴメッヅ伯こそ可い面の皮では御座いませぬか、が、伯爵は其の後此の分割せられました名譽を尊ぶの念がなかつた樣に見えましたので、ワレウスカは以後全く奈翁の物となつて了つたので御座います。

奈翁は思が屆いた嬉しさやら、餘所の花を手折つた誇りやらで、毎日ワレウスカを傍に寄びつけて、活計歡樂心の儘に樂んで居たので御座います。當時近きに侍つて居たコンスタンといふ人の日記を見ると、斯ういふことが書いてあります。『皇帝と伯爵夫人とは常に食事を共にして居られた。皇帝が留守の時には夫人は頻と讀書に耽つて居りますか、又は窓側近くに佇立んで、皇帝自身が練兵場で兵卒を調練せられて居る樣に見惚れて居りました。夫人は實に天使の樣な婦人でありました』と、斯ういふことが書いてあるのです。奈翁は夫人をフインケンスタインの本營に止めて置いたものと見えまする。

歷史は虛僞の事實を陳述し、詭辯を弄しますので、奈翁に關する此の邊の事蹟に就いては、事實を抹殺して居る跡がありますが、ワレウスカ夫人は實に此の時より奈翁の傳記に花を咲かせたので御座います。夫人は奈翁に粘着いて巴

里にも行きましたし又千八百九年には墺太利にも粘着いて行きました。ワグラム戰役の後には、夫人は維納郊外の去る小かなる家に棲んで居りましたが、夕刻になるとコンスタンが毎日此の夫人を馬車に乘せて、シエインブルンの宮殿に送り届けたので御座います、其の通路が砲兵の往來で滅茶々々になつて居ましたので、雨の降る日などには殆ど沼の樣になつて居たので御座います、で『これ、コンスタン、確乎注意をしてくれよ、車にも馭者にも變はないか』など、、奈翁は大心配で夫人を宮殿から送り出したので御座いますが或晩の事、馬車が此の沼で轉覆つた珍事がありました。が、幸にして夫人には怪我が御座りませんでした。婦人が奈翁の子を生み落しましたのは卽ち此の年で御座います。御存知の如く奈翁の開係して居ました婦人には、誰も是れも子がなかつたので御座いますが、奈翁は此の時から自分にも尙且子種があるといふことを悟つてワレウスカを離婚するの決心をいたしましたのだ相です。

## （七）

奈翁はマーリー、ルイとの結婚後も、ワレウスカとの情交を絶たなかつたので御座います。情交を絶たないどころでは御座いませぬ、ワレウスカは始終奈翁の訪問を受け、又チユーレリーにも絶えず祕密に訪ねてまゐりました。すると奈翁は正妻が寢室に退くのを待つて、暗い〳〵廊下を二階に迎ひ入れたのです。『總御座います。で、ワレウスカは常に此樣なことをいつて居りましたのです。て妾が思想と靈感とは彼より得たるものなり、彼は妾が未來なり、妾が生命なり』夫ばかりでは御座いませぬ、ワレウスカは頭髮の一束を中に封じ込めて、其の上に『貴郎が妾をお忘れなさつても、妾は貴郎を忘れませぬ』といふ、意を彫刻した金の指輪を贈つたので御座います。非常な惚れ方では御座いませぬか。

で、ワレウスカは奈翁の讓位を聞や否や倉皇フオンテインブロウに赴いて夜

の十時頃で御座いましたらう。面會を申入れたのです。が、彼女は奈翁の室の戸まで近づくことが出來たばかりで、如何しても面會することが出來ませぬ。例のコンスタンが其處に夜の番をして居ましたので、之に賴んで何卒して今一度面會しようと骨を折つたので御座いますが、奈翁は如何しても之を許しませぬでした。夜の寢殿の戸は固く固く鎖されて、中には百感交々胸に集まつて大煩悶、大苦悶をして居る憂き人が、此方彼方と心急しく驅け廻つて居る足音と時々何か獨言つ聲とが、森閑たる夜の闇を破つて室外に聞えるばかりで御座いました。でも何時かは呼び入れらるゝ事もあるだらうと思つてワレウスカは其處を動かばこそ、肌を徹す夜氣にブル〳〵震へながら、到頭一夜を室外に明かしたので御座います。けれども面會は如何しても叶はず、女が此樣な處に居るものでないといつて、夜が白むと早々追ひ還されて了ひました。

今も昔も、東も西も、女の一念には變りは御座いませぬ。ワレウスカは今一度戀人に逢はねば死際が惡いと許り敦圉いたので御座います。が、彼女は日頃から奈翁の頑固な性質を知つて居ましたので、一時は陰に隱れて形勢を窺ひ、皇后のマーリー、ルイが維納に赴きまする日を待つてエルバ島へ訪れて行かうと決心したのです。で、彼女は今こそ時は來れと、伊太利への旅行を企て、フロレンスから、手紙を戀人に出して、自分の身の振かたづけもあるし、第一二人の間に出來た子供の將來に付いても、種々相談をしたいことがありますから何卒今一度御呼寄せを願ひますと賴むと、七月の二十七日に夫を許すといふ嬉しい〳〵返事がまゐつたので御座います。

で、ワレウスカは取るものも取り敢ず、いそ〳〵エルバ島へ渡つて見まするとこれは、案外、戀人も大に喜んでくれると思ひの外、彼女は大變に叱られたので御座います。夫はワレウスカが公然エルバ島に渡つたので、歐洲では皇后のマーリー、ルイが渡つたのだといふ評判が立つたからで御座います。奈翁の

考へでは極祕密の旅行を欲して居ましたのに拘らず、斯う事が表立つたのは、ワレウスカが自分を馬鹿にして居るのだと、一圖に思ひ込んだ者と見えます。流石の奈翁は種々の悲運に日頃からの冷靜な考を喪つたものと見えまするが、近侍の人が手を代へ品を換へて宥めすかしましたので、漸う心が落著いて、竟にはワレウスカの差し出した手を握つたので御座います、夫でもワレスカが、『何せ御讓位の折、フオンティプロウで無情な妾の面會を御拒りなさつたのですか』と怨じた時には、奈翁は額に手を當て『否、此處に居ても淋しいことは寸毫もないよ』と取附く島もない返事をいたしたので御座います。

（八）

奈翁はワレウスカと共に磯吹く松風に心を洗ひ、沖邊の濤音に耳を澄まして二日の間同じい天幕の中に日を送りましたが、其の間奈翁は時としては、遙に自分の出生地たるコルシカ島を指して其地の氣候風俗など珍らし事どもをワレウスカに語りて聞かせ又時としてはワレウスカの妹と共に子供と戯れ遊ぶなど、他愛もないことをして其の日を暮して居つたといひますが、然し此の二日といふものは、全然世間との交通を遮斷して、何人にも面會をいたしませんでした點より察しますると、何か重大なる事件に就いて頻と協議を凝したものとも思はれまする。

二日の夕刻になりまして奈翁は突然二人は一刻も早く相別れねばならぬといふことをワレウスカに語つたので御座います。之は外でも御座いませぬ。奈翁の身にとりては時節が全く變つて居るので御座います。昨日の權威赫々たる時におきましては皇后の二人や其處等を有つて居りましたとて、世間では別に非難を容れるものも御座いませぬのでせうが、今は讓位を強ひられて、エルバ島に幽囚の身となり、周圍には歐洲列强といふ敵が樣子如何にと目をそばだてゝ注意して居まするのみならず、一方には其の正妻たるマーリー、ルイを回復し

ようと心配して居る矢先で御座いますから、迂濶とした事は出來ませぬ。エルバ島は地中海の一小孤島に過ぎぬ。けれども彼れは此島の王である。其王の資格より見ましても決して馬鹿な擧動は出來ませぬ。責任が重う御座います。第一ポルト、フエライオは硝子で製造した家の樣な土地で御座いますから、奈翁の一擧手一投足が悉く歐洲列强に見え透くので御座います。加之ならず、エルバ島に居りました兵隊は婦女を姦するなど亂暴狼藉到らざるなき有樣でしたから、風紀を維持する上に於ても、公德を代表して滅多なことは出來なかつたので御座います。夫れや是れやにて奈翁は如何しても普通の法律の下に服從せねばならなかつたのです。

で、奈翁は一刻の猶豫もなく此の決心を斷行したので御座います。三日目の朝にはワレウスカを載せ去るべき船は早くも艤裝を了へて山の麓に乘船を待つて居りましたので、ワレウスカは泣いても喚いても、ポルト、フエライオから乘船することは出來なかつたので御座います（ポルト、フエライオでは皇后の行啓を豫期して萬端の奉迎準備が整つて居たのです）其の上奈翁は萬一の事を慮つてワレウスカの歸る道筋に監視を附け、以前夫人と同道してまゐりました侍者を伴はしめ、歸れ〳〵、早く〳〵と急き立てたので御座います。

斯なつては、ワレウスカも最早エルバ島に止まる望みを失つて了ひました。永久に其望みを失つて了つたので御座います。此の事は奈翁にとつても一の打擊でありました。戀は總ての物と共に奈翁と離れつゝあつたので御座います。で、夫れも哀れと思つたので御座いませう。其日は馬鹿に蒸暑い日で御座いまして、始終頭が壓へつけらるゝ樣な感事がいたしました上に、海上には狹霧が一杯に立ち罩め、モント、ギオーヴの山巔に重い〳〵白雲が懸り出したかと見る間に天日を蔽ひ、風さへ裂しく吹き出でゝ天幕のはためき少時も止まずといふ慘狀を呈したので御座います。

奈翁とワレウスカとは、此暴風の間に立つて離別を告げたので御座います。而して奈翁はクルリ首をめぐらしてラ、マドンの方へ馬を驅けさせ、ワレウスカは悄然として海岸へ下つて行つたので御座います。

（九）

奈翁はワレウスカと此樣な敢果ない別離をして隱家に歸りますと、暴風が時時刻々に猛威を劇しくして、樹を拔き家を飛ばさんとする樣になりましたので慌てゝ使者をマルシアナに走せさせ、ワレウスカに出發を見合せよとの命令を下しましたが、最う遲う御座いました。ワレウスカは既にボルト、ロンゴーンに向つて出發して居ましたので、使者は跡を追はないで、其の儘引還しましたので御座います。

烏羽玉のあやめも判らぬ眞の暗夜に、稚子を連れ、暴風に面をさらしつゝ、山越え谷越え、とぼ〳〵遙々の路をボルト、ロンゴーンに到著いたしました、



ワレウスカの困難は語にも筆にも盡されませぬでした。愈々到著して見ると、船が待つて居ります。が、港務官は海の荒れ模樣を見て乘船を許しませぬ。ワレワスナは皇帝の命令だといつて頻りに爭ひましたけれど、港務官は尙且危險だといつて乘船を許しませぬ。詮術がないからワレウスカはモラと云次の小さい灣から船に乘り暴風を冒してエルバ島を出發いたしましたので御座います。流石の奈翁も此の話を聞いては非常に後悔いたした相ですが、程經て其の安著を聞き漸う安心をしたといひまする。が、運は惡ければ益々惡いもの。奈翁の身の上には今一の不幸が降つて來たので御座ります。

奈翁がモント、ギオーヴの天幕內で、ワレウスカと共に戀しき昔物語をして居る間に、其の來島を待ち焦れて居たマーリー、ルイは知らず識らずネッペルグといふ男の情婦となつて了つたので御座います。で例の奈翁の使者ソルベーが皇帝の命を傳へて、一所にエルバ島へ落ちて下さいと賴みました時には、厭、

厭で押通して了つた、これと同時にルイは墺國宰相メッテルニッヒからバルマは固りエルバ島附近の土地は何處へも決して行くことならぬといふ手紙を請取りましたので、ルイは其の情夫のネッペルグに伴はれて氷山の氷を踏みつゝ一時瑞西の山奥深くに姿を隱さねばならぬことゝなりました。

氣の毒なのは奈翁で御座います。自分は此樣にルイを戀慕うて居まするにも拘らず失方では全く奈翁を忘れて居るので御座います。鮑の片思とは全くこれの事です。其上墺太利の官吏が絶えずルイの身邊を警護して居まするので、ルイは逃げようとしたつてどうも逃げようがありませぬ。奈翁は到頭耐へ切ず成て、キャンベル大佐に何卒英國とカストレリアフ卿を說き、妻と子をエルバ島に呼寄せる樣にしてくれと賴んだのでありますが、十月の十日にも亦復タスカニー大公に書を寄せて、ルイとの通信を許してくれる樣、毎週一回づゝルイの消息を自分に報道してくれる樣にと賴んだのでありますが、ルイの消息は以後杳として絶えて了ひました。一通の手紙も寄しませぬでした。で、奈翁は帝王の冠を回復して再び舊時の榮華に誇るの日に至らなければ、如何してもルイを見ることが出來ぬと諦めまして、日に月にルイの事を口に出さぬようになりました。又エルバの島民も斯うなつては到底眞實の皇后を歡迎するの日が來ぬと諦めまして、例の八月十五日の祭典に催しました仕掛煙火の殘餘を、皇妃ポーランとマルシアナ市長の歡迎に殘らず使ひ切つて了つたので御座います。これでお了ひ

# ゾラの遺骨を葬る

文學及び藝術界に於ける變型に三種あり。神祕派は其の一にして、ノルダウ氏は、プレラファライト、表象派、トルストイ派、及びワグネル崇拜派を此の變型に屬せしめしたり。第二の變型は我狂にして、デカダン、イプセン派ニイチエ等之れに屬し、ゾラ及びゾラの一派及び之に倣ふ年少獨逸の劇窮者、所謂自然派なるものを第三の變型とす。神祕派及び我狂は今日に在ても尚其發展を中止せざるのみか、盛に現代の美的良心を支配しつゝあれば、此の二者は特に詳論するの要あるべきも、自然派又は名寫實派に至つては、既に時代後れの一思潮に屬し、くだ〳〵しくこゝに贅論するの要なし。自然主義は其の故國たる佛國に於てすら既に滅絶せり。吾人は死屍に笞つを好むものにあらざれども、或一部の我が邦文學者が今に及びて其の死屍を發掘し、事新らしげにこれを振りまはし居るを見て、パンテオンならぬ舊の墓地に其の骨を葬らんとするのみ。否、或一部の我邦文學者のみならず、其の故國なる佛國に於ても、去る四日竟にゾラの死骨を發掘してこれをパンテオンに改葬したり。吾人は此の改葬を以てこれを彼が文學上の功績に歸せんよりも、三宅雪嶺氏と同じく、ドレフユウ事件に關係せるものとするの至當を認むるも、文學上より論ずるときは、讀賣新聞の社說に反對して、再び舊の墓地に其の骨を移葬せんとを希ふものなり。

吾人は再言す、佛國に於ける自然主義は既に死せり。これが創立者たるゾラの模倣者中にも、踏み止まりて、誠實に彼が流を汲まんとするものは、今や一人もなし。モウパッサンの如きに至つては、其の瘋癲病院内に悶死するの以前早くも漸次心理小說に筆を染むるに至れり。又ヒユスマンの如きは、これを自然派に屬する小說家といはんよりも、寧ろデカダンに屬せしむるを至當とやせ

ん。而してロスニーは竟に石器時代にも屬すと思はるべき小説を出すに至りき。されぱゾラの著ラ、テルの初めて世に表はるゝや、當時彼が子弟ボンティン、ロスニー、デカーブス、マルゲリット及びグインは、公に一宣言書を發表して、其の猥褻見るに堪へざるふしぐを指摘して、以後は彼を師とし仰がざらんことを契はんとまで敦圉きたり。彼れが小説の賣行よかりしものは、其のポピュラルなるの點にあらずして、讀者が舊習に拘泥むの結果これをしも捨て難しとしたるに由る。晩年の著に至つては、聊かこれと趣を異にし、其の評判爾く嘖々たりしものは、作者の才氣爛漫たるを愛づるより出で、別に藝術的の根據あつて然りしにはあらざるなり。彼は多數讀者の興味を惹くべきの材料を擇べるも如何に此の材料を取扱ふべきかは毫も念頭に置かざりき。ラルヂアン又はラ、デバクルの如き材を祖國の艱難時に取りたるの小説は、如何なる凡手と雖ども描きて以て自國人の感興を買ひ得ざるものぞ。而して彼れは他の一方に於いて讀者の助倍心を挑發することを忘れざりしなり。文學藝術の上より見て此くの如き小説の取るに足らざるべきは言を待たず。されば彼れは其の本國に於てすら一味の徒黨を作るに、隨分手間取りたり。而かして其の徒與の如きも久しからずして各叛旗を揚げたること上述の如し。若し夫れ外國の模倣、剽竊者に至つては、徒らに其の流行を趁うて日も尚ほ足らざるの觀あるも、憐れむべし、其の流行は本國に於て業に既に廢物として泥土に委せられたるを。

ゾラ一味の徒與は、彼れを呼んで寫實派の元祖といふ。以爲らく、寫實派の理想派と異る所は、事物を觀察して其の眞を寫出するにありと。然れども、こは如何なる小説家と雖も、なさで叶はぬことなり。一の小説が他の小説よりも事物を寫して眞に迫るものあるは、素審美的の傾向より出でたるにあらずして作者の手腕に基きぬ。藝術の本源は感情にあり。おほまかに論ずれば外界の現

象より喚び起されたる感情は自から發して寫實となり、內界より湧き出でたる感情は自から表はれ理想となる。而して此の感情を寫さんとせば、勢ひ選擇せざるを得ず、抑揚なかるべからず、頓挫なき能はず。作者か寫して以て眞となす所のものは、此に於てか現象其の者にあらずして、目擊したる現象に過ぎざるは論を待たず。寫眞派又の名自然主義者の筆に成れる所のものは、現實の說明に過ぎず、現實界に對する作者の興味を寫せるに過ぎず。卽ち作者の思想を示したるものにして、現實其の者にあらず。自然其の者にあらず。個人的なり、主觀的なり。人工的なり。

寫實派は如上論ずる所一の虛語のみ。然れども、こゝにをかしきは近頃に至りて、これに別種の意義を有たしめたること是れなり。曰く、寫實派は下層社會の生活、凡人、凡物を組織的に取扱ふものなりと。此說によるときは、勞働者、農夫、市人等が編中に現るゝものを寫實派の小說とし、神、英雄、帝王等を寫したるものを理想派の小說となさゞるを得じ。其の說の笑ふべく、取るべからざるは論ずるまでもなきことなり。

ゾラ一味の黨與は、彼れが筆の印象深きを稱へて止まず。然れどもイムプレッショニズムを尊ぶは、素畫工の業なり。畫工は其の視覺の印象を寫出し、其の見たる儘を描くも可なり。知覺中樞の働作と最高なる理想中樞の働作を結合することなくとも、畫は卽ち畫なり。然れども、詩歌小說に至つては全く然らず。其の媒介をなすものは言語なり。知覺中樞の働作を表示するにあらずして、理想及び判斷中樞の働作を表示せざるべからず。單に知覺を表示することのみならば、動物も亦これを能くし得べし。文學上のイムプレッショニズムは蠻性復元の一好例にして、所謂變型者が心的生活の最も顯著なる特性なり。

ゾラは自己の小說を呼んで『人類の書類』といひ又『經驗小說』といふ。彼れは自己の小說を以て、果して科學がこれより事實を蒐集し得るの重要書類

となしたるか。笑ふべし、憫むべし。科學は假說を排す。科學は如何に自然らしく見ゆるも、假說の人間より何等の利益を得ることなし。科學は眞に生活したる人間と、眞に生じたる出來事とを要す。小說は個人、又は團體の運命を取扱ふに過ぎざるも、科學は億兆の運命に關する報道を得んことを要求す。人類の書類とは警官の報告、課稅表、商業統計、犯罪及び自殺の統計、米價、俸給、婚姻、出產、死亡、嫡子、庶子に關する報道の如きものをいふ。吾人は此等の書類を調査してこゝに初めて人類の生活、幸不幸、及び進步の狀態を研究し得め、吾人の文明史はいかに事實に缺如すとも、斷じてゾラの小說を眼中に措かずして却て懶き統計表を顧みんのみ。其の小說を呼びて經驗小說といふが如きに至つては、特に本氣の汰沙とも覺えざるなり。科學的經驗てふものゝ性質に關して、彼れは全然無智なりき。神經質の人間を假設し、想像の條件をこれに附し、想像の働作をこれに伴はしめて、以て自らこれを經驗したりといふ。



迂笑ふべからずや。彼れは他の變型者と同じく、全然自己の生活し居れる世界を知らざりしなり。彼れは自然、又は人類に著服せずして、唯自己の『我』に執著せるのみ。ラワソモアに於ける巴里勞働者の生活、習慣、風俗、言語はプアローのル、スブリムより借り入れたる者なり。ラム、パージ、ダモアの冒險は、メモア、ゾ、カサノワより竊み來れるものなり。ナヽに於て表はれたるムツフアー伯のマソヒズム又はバッシヴィズムはトーマスオトウエーのヴエニス、ブレザーヴトニ關するティインの評論中より發見したるものに過ぎず。

如上論じ來れば、ゾラの小說に就ては、其の議論の點より見るも、其敍述の點より見るも執り得べき點は一點もあることなし。唯其寫實主義てふ語に代へて、自然主義てふ語を發見し、後世後進の士をして今日に至るまで、尙これを魔道に陷らしめつゝあるの業こそ慥に彼れの一功績なるべきか。其の他の功績に至つては吾人は不幸にして未だ其の一をも發見することを得ず。

# 左ぎつちよ

刑事人類學の開祖たる伊太利の精神病學者ロムブロゾー氏が行年七十三歳を以て今回終に永眠せられたことは昨紙路透電報の報ずる所である、氏の著『婦人犯罪論』及び『天才と瘋顛』は趣味あり且實益ある研究として廣く天下に喧傳せられて居るが、こは餘りに科學めきて普通讀者には解し難きふしも少くない、で余は今氏が永眠の報に接した此好機會を利用して、氏が小研究の一部で、俗耳に入り易きものを引つこぬいて、玆にこれを紹介すると同時に謹しんで學界の一損失に對し多大の弔意を表する

我々人類は左手を用ふるよりも右手を用ふる方が多い。隨つて敏捷に左手を利かすものは甚だ少い。左利は女や子供の中に多い。而して文明人よりも昔の人に餘程多かつた。これは事實である。此事實の記錄で今に傳はりて居るものも少くない。けれども統計的にこれを決しようとしたのは古來一人もない。其處でロムブロゾ氏は統計的に此事實を調べて見ようと思ひ立つた。即ち千二十九人の職工と軍人とに就いて統計を取て見た結果、男の左利が四分、女の左利が五分乃至八分と云ふ割合であることを發見した。此割合は精神病者の中でも餘り多く變つて居なかつた。併し犯罪人の間では、男の左利が右の割合の三倍以上、即ち一割三分、女の左利が殆ど五分、即ち三割二分であつた。特に或種の犯罪人例へば掏摸の如きものゝ間では、其割合が一層多い。即ち三割三分の高率を示して居つた。泥棒や人殺になると其割合が少しく下つて九分乃至一割位であつた。兎に角此統計は犯罪人と野蠻人との關係、夫から普通の健全な人と精神病者との區別を示して居る、實に面白い特性を發見したものと、いはねばならぬ。

隴を得て蜀を望むは人情の常ロムブロゾー氏も、當初此事實を發見した折に

は、唯手の左ぎつちよだけを研究して、此研究題目より一歩も外へ出ないやうにと勉めて居たのだが、研究が進むにつれて、廣く五感の左利――例へば左利の眼のもの――をも調て見ようと思ひ立つた。氏は此考へを以て多くの友人や學生、勞働者に就いて生理上の研究を試みて見たが、左利のものは左ぎつちよの者よりも餘程割合が多く、普通人の二割六分を下らなかつた。此に不思議なのは左ぎつちよの者だからとて、必ずしも五感が左利と限つて居ないことである。

犯罪人は總じて左利である。ボノ博士の計算によると、彼等の視覺は非常に鋭敏である。而して右よりも左の眼が驚くほど鋭敏である。トムニー氏や、アディ氏の研究によると、精神病者の左の感覺の鋭敏なのは例外と云よりも寧ろ原則であつて、其割合は四割四分以上に上つて居るので、左ぎつちよの者は犯罪人に多く、感覺の左利は精神病者の中に多い。

此等の研究の意味を精密に知らうとするには、動物の種族が人間に近寄つて而して完全の域に近づけば近づくほど、器官の均齊を失ふことが益甚だしくなると云ふ事實を知つて置かねばならぬ。リビングストン氏の説によると、鶏鴟は左ぎつちよだ。獅子のやうな猛獸も矢張左ぎつちよだ夫からカメラノ氏は十脚の甲殼類の左の觸絲は右のよりも二百グラムだけ重いと云ふことを發見し、ローレー氏は人間に近い二七頭の猿に就いて、左の肩が右のよりも重いと云ふ事實を發見した。又パロー氏は、生兒の身體の左右兩部の重量は略同樣であるを原則とする。赤兒は其初め孰とも限らず無差別に之を用ひて居るが、二歳になつて漸く右の方を用ひ出し、中年に至つて盛にこれを用ひ、老年に至つて用ひ止む勢ひを示して居ると云つて居る。人によつては、器官が上等になればなるほど、此不均齊の傾向が益増加し、又これを使へば使ふ程其傾向が益増加する。で、人間の身體は左右孰れかが餘計に發達する。特に腦に於て此の

傾向が著るしい。卽はち普通の人間では左頭部が非常に發達して居る。夫れは右頭部が左頭部よりも直接に又た多量に心臟から血液を受ける便益がある故である。

加之ならず、凡て神經界は機關が常に交叉して居て。身體の右側は左腦より左側は右腦より神經を受け居る。隨つて身體の右側は左側よりも感覺が敏捷でなく、又强壯でない。而して腦は人體中最も發達した機關であるから、使へば使ふほど不均齊の勢ひが增加する。で、文化の度が進むに隨つて、文明人は野蠻人に比して益右利となるばかりである。夫れから右利は女よりも男に多く子供よりも大人に多い。女や野蠻人は元來の左利でなくとも、左ぎつちよの模型のやうな態度と運動を有して居る。男は右手で持ち堪へ、女は左手で持ち堪へる。女は右より左に、男は左より右にボタンをかける。女と子供は線を引き時計のネヂを振るにも先づ右より初め。大人は左より初める。亞剌比亞人の如き未開の人民は、字を書くにも右から初めて左の方へ書き續ける（此點から見れば日本人も未だ野蠻人の狀況を脫して居ないのだ）子供なども大人が直してやらないと、矢張字を書くに右の方から書き初める。之はデロネー氏の研究した事實であるが、氏は猶ほ進んで古代のクロノメーターは右より左へ廻り、近代のは左より右へ廻つて居ると云ふことをも發見した。

上述の如く、腦の左右は一樣の作用を爲て居らぬ。で、吾人は感情などを制するに非常に困難なる場合がある。例くば二重の人格がある場合の如きが之である。ロムブロゾー氏の著『天才と瘋顚』中に出て居る幻象に迷ふて居る人が卽ち其例である。此人間は右と左に聲を聞いたと云つて居るけれど、實際右に聞いたと云ふのは嘘であつた。左の耳の感覺が薄弱で、隨つて其音が組織に感受する力がないから右に聞えたと云ふのは、自分の空想に過なかつたと彼自身に白狀したことを見ても嘘であつたことが判る。ボール氏は此事に關して今

一の例を示して居る。此例の人は日射病から狂氣になつて、初めは自分で自分の病狀如何を尋ねる聲を聞いた相だが、後には此聲に加へて長い髭を生して、眼の眞黑な一幽靈が現來て、思ひの儘に此人間を弄んだ相だ。幽靈が火中に時計を投せよと命じたので、彼はこれを火中に投じて了つた。遂には一人の女を毒殺せよと命せられたので、彼は到頭決意して其女を殺して了つた。而して彼は醫師に向つてから云ふことを言つた『私は二つの腦を有つて居ります、右の方の私のでない腦と、左の方の私の魔の腦と二つ有つて居ります、而して不幸福なことには常も左の腦が右の腦に勝ちました』所謂懷疑病と云ふのもコンナ風で起るもので、頭の中に諾否二つが爭つて、取捨孰とも決心の著かぬ折には、他よりこれを誘ふ言語や行爲があれば、直ぐそれに應ずるものである。これは腦の左右二部に矛盾がある例で、恰も二頭の馬の中、一頭は右せんとし、一頭は左せんとすると同樣、其間に秩序を保つ外部の勢力がなければ、其力の結果は惰性によつて滅殺されて了ふのである。ロムブロゾー氏の取扱つた或老人の精神病者は、石版に書てあるやうに、倒に字を書た。我々は子供の折から左の腦で文字の形を想像し、又覺えて、而して左右孰れか勝れて居る腦でこれを再出するのである。フオグト氏は曾て一百人の子供に就いて面白い試驗をして見たことがある。卽ち此等の子供に先づ右手で字を書かせて而して後左手で書かしたら、毎度字體は似て居なかつたが、左手で倒に書かせて、これを鏡に寫したら、字體が整然と似て居たといふことだ。

以上はホンの假定に過ぎないのであるが、罪人には普通の人間よりも餘程左ぎつちよが多く、精神病者には罪人や普通の人間よりも今一層左利のものが多いと云ふのは確なる事實である。罪人や精神病者の右腦の作用が普通の人間よりも勝れて居るといふのは事實である。健康な人は左の腦で考へ、又感ずるけれど、罪人や精神病者は右の腦で考へ又感ずる。所謂根性が曲つて居る。犯罪

人の腦と頭蓋骨とに就てロムブロゾー氏の研究した所によると、右の腦が著るしく發達して居たゞけは確に事實である。其例外とも見るべきはビショップ氏の取扱つた、左が右よりも廿グレイン重かつたと云ふ罪人の腦、唯これ一つである。ヂアコミニー氏の量つた所によると、強盜殺人の十一個の腦中、右腦が左腦より二十一グレイン重かつたのが八個、平均卅グレインだけ左腦が重かつたのがタッタ三個であつた。チユーリンの博物館でロムブロゾー氏の研究した四十四個の罪人の腦中、右腦の偏勝を見たのが四割一分、左腦の偏勝が二割しかなかつた。これは消極的にボイト及びアイルランド二氏が記述した普通人の左腦の偏勝と云ふことゝ、バスチアン氏の腦の左半部の灰白物質の比重が右半部に比して重いと云ふ發見と一致して居るのである。

如何して或人は左ぎつちよや左利であるのに、或人はてんで左が利かないのか、又精神病者でもなく、白痴でもなく、又罪人でもない左ぎつちよの人が世界に居るか如何かと云ふことは、運動に影響する腦の作用は、五官に及ぼす腦の作用と全く異つて居ると云ふ事實で以て説明することが出來るのである。其他個人に單一な遺傳的の特性があるからとて、其人の總ての組織が此爲に發達を妨げられ、又は劣等な狀態に在るものと速斷することは出來ぬ。左ぎつちよや左利は、唯樂器の一の音と云ふだけで單獨に放して見れば、何の意味もなく何の調子もない。精神病者や罪人の此の如き形跡は、これを頭腦の著るしき不均齊とか、幻覺とか其他種々の病狀と結付けて見なければ、何の意味もないのである。又美人の中で眞の左ぎつちよを發見するのは、大惡人の中に其特性を有つて居ない者があるか如何かを發見すると同樣、困難でないでもない。一寸斷つて置くがロムブロゾー氏が斯う云ひたとて、左ぎつちよは皆惡人であると斷じたのではありませぬ。お差支がありましたら平に謝罪ります。併し此を多くの特性と結び付けて見ると、左ぎつちよは、人間中の種族中で最も惡い性質

の一つを形造るに力を效すものであるかも知れぬ。

ロムブロゾー氏は此研究を終るに臨みて次のやうなことを云つて居る。

『こゝに一つ奇妙なことがある。大分以前のことだ。私が種々學問上の研究を試みた結果、遂にかう云ふ結論に到著したことがある。夫は外でもない。エミリア、ロムバムヂー及びタスカニー等の住民も既に私と同樣のことを云つて居ることだ。彼等の間では『彼は左ざつちよ』と云ふときは、其人の信用すべからざることを言ひ表はして居るのであります』

# 何處が面白い

## ▲不健全極まる現代の文藝（一）

べらんめえ或日倉惶として出勤す。すると、例の椋十翁が俺の姿を見や否や編輯局の途中俺を邀擊して曰く、『此頃の文藝ちう者ほど、はあ、世の中に怪しからぬものはないぞ』と全然喧嘩腰だ。べらんめえも聊か面喰つて凝と翁の貌を見つめて居ると、翁は齒の無い口をもぐ〳〵させて『如何も此頃の文藝は調子が變だお前一つ檢閲して見る氣はねえか』との事夫なら夫で物靜に云つたが可い、とべらんめえも漸う玆に駒を撫で下して委細を畏まつた。夫から種々の雜誌を取り寄せ、禿頭に湯氣を立て、蚤取眼そゝつかしくも檢閲して見たが、さて〳〵無え時は無えものだ、椋十翁が所謂『怪しからぬちう』ものは到頭發見らなかつた。と云ふのも、結局は當節の小説家や雜誌屋が揃ひも揃つてケチ

な根性だからで、事少しく猥褻にわたるの虞があると、直に○○やゝゝを入れあがつて其筋の細い網を潜つて居る。そんなケチな根性で小説が書けたり、雑誌が出されて堪まるもんかい。やるならやるで、何處々々までも膽魂を据ゑて　さ、其筋の檢閲なんかを屁とも思はず、ドシ〳〵自分の主義を實行すべしだ。何ぞと云へば主義呼ばゝりをする癖に、當局のお目玉を頂戴すると、直と慄へ上るとは意氣地のねえ事だ。自然主義なら自然主義で可い、往く處まで往つて見るが可い、中途で止すとは餘り意氣地が無さ過ぎるぢちねえか。夫とも發賣禁止や罰金が恐けりや初つからそんな猥褻なことを書かぬが可い。其筋の檢閲を神經過敏だ神經過敏だと罵つてる癖に手前共も何時の間には神經過敏になつて居るぢやねえか。コンナ小氣味の可いこつたらねえ。お蔭で俺も文藝裁判所の前で風俗壞亂罪を告發するの手間が省けたと云ふもんだ。何、新文藝と云ふ雑誌が發賣を禁止されたと、其筋の奴等も實に失敬極まるぢやねえか、俺がまだ檢閲をせぬ前に檢閲をしやがつて發賣を禁止するとは。併し其筋ではこれが商賣だ。此方はまあ云はゞ土族の商賣で、何處にか迂い處があつても詮方がねえ。其代り今度は此俺が當局の目に入らねえ——否入つては居るけれど、法律に明文がねえんで如何ともすることの出來ねえ犯罪を摘發して御覽に入れる。……と云ふ犯罪は果してドンナ犯罪か。其本論はズッと後廻しにして置いて之から五月の雑誌について具體的に其例を擧げて見せる。先づ第一に此槍玉にあがるのは中央公論だ。

五月の中央公論には眞山青果の『前額記』と森田草平の『四月盡』とが出て居る其前額記の主人公てえのが唯の人間ぢやあねえて。

時には又不意と、物狂はしいほど此動物が憎くなる時もある。止め度も無く涙を頬に流しながら、下駄を上げて打つて〳〵〳〵、死さうに悶えるまで慟くさいなんだ時もある。錐があれば錐、ナイフがあればナイフ、憐れな動物

を樹に縛り付けて置いて、自分も泣きながら血を犬の身體中から流して居て、山歸りの太い杣の腕に抱き止められたこともあつた。酷くすればするほど何んとも云はれぬ優しい快い悲しさが身内に溢れるのであつた。

と云ふ狂者だ。コンナ狂者の親類に碌な奴があらう筈はねえ。其父親てえ奴が第一尋常大抵な奴ぢやねえ。可い年をしやがつて息子より若え後妻を貰つて、其後妻を

後手にしばり下げ、薄荷をひたした古手拭を其鼻の下に縛り付けて而して聲を立てるな、聲を立てるなと、低い聲で叱りながら弓の折で身體を打下らす。

と云ふ狂者だ。ソンナ狂者だから又碌な子供の生れやう筈がねえ。

兄は生れて二週間の間、人を雇つて其の肌で暖めなければ、燬がつやうに啼聲も血の色も衰へて行く嬰兒であつた。姉が生まれた。男の子が二人生れて二人とも死んで了つた。その後に頭の鉢の氣味惡く開いた、髪の毛にも瞳孔にも色素の足りない自分が生れて『蟹のやうに手足が痩せて、一年經つても頸の骨が据わらなかつた』のも無理はねえ。コンナ主人公だから其遊びに行く場所が濱町の女髪結の所か又は

全くよ、芝居も見てもあの沈つと辛抱して、泣き暮らす喜多村の役ね、私もあんなにして暮したいわ、ねえ、小母さん

なんかと云ふ女を相手にして遊ばねばならぬことになるのだ。コンナ不快な小説を讀まされて嬉しがる奴が何處の世界にあるものか。

## ▲不健全極まる現代の文藝（二）

『四月盡』の主人公てえのも實に蟲の好かねえ奴だ。『溜池の洋服店に年期奉公をして居る』『十臺の小僧上り』の癖に『主人の娘と通じ』、揚句の果が、六郷川の堤で毒藥を仰んで心中しようとしたシタヽカ者だ。其時に娘と一緒に死んで了つて居れば、コンナ生恥もさらさなかつたらうに、因果な事にはつい助かつた

ものだから、素性の知れねえ女なんかを女房にしてヤキモキして居るんだ。罰だ。

何者とも、何處から來たとも知らぬ。自分の内へ來る迄、何處で何をして居たのか、それも疑つて見れば分らない。十年の間、朝晩顔を合さぬ日はない……俺はあの女について何一つ知らない。只あの女だけが知つて居る。それ許りなら可いが、これから先き永い一生の間、矢張此儘にして何事もなく生きて行く。そんな事のある筈はない、そんな事の堪へられよう筈はない。

なんてベソを掻いたつて自業自得だから詮方がねえ。

『前額記』だつて『四月盡』だつて主人公にして既に然りだから、コンナ奴の事蹟に碌なことがあらう筈はねえ。讀んで居て面白いと思ふ處は一つもねえ。不快を覺ゆるばかりだ。全然暗い暗い穴の中を探手をしながら匍つて行くやうだ

次は早稻田文學だ。

早稻田文學には岩野泡鳴の『柳の絲』てえのが出て居る。これが此頃我文壇で流行ると云ふ『自己告白』てえのを實現したもんだ。何だ、多寡が知れた賣女風情を買ふに、紀那主義もねえもんだ。

無飾の本能を人間が獨りおほびらに押し通すところに、眞の努力、勇氣、奮鬪、誠實、戀と生命がある。

ウフ、呆れて物が云はれねえ。女郎にふられた自己の告白、不名譽、だらしなさが立派に印刷されて出版されるかと想へば、流石は太平の御世とことぶき申奉るより外はねえ。何しろこれは女郎部屋の事を書いたんだから、所謂其筋の網の目を潜る〇〇が彼方此方に入つて居る。ケチな野郎だ。

同雜誌に出て居る中村孤月の『父』も巨じく不健全な型に囚はれて居る。何のことはねえ、赤兒の泣聲が五月蠅せえつて云ふ事で全篇を埋たものだ。此主人公はノルダウの所謂デゼネレートして居る奴で、健全な人間ならば、赤兒の泣

き聲は五月蠅せえには相違ねえが、其處に自分の細胞が分裂して居、其處に自己の第二の生命が存するのを自覺し、此を以て彼を排斥するのが通例だ。然るにあらう事かあるまい事か

何に此處は地の上だと云ふのか、石の上に轉して置くのが何が惡るいんだ。

さあさうして捨て置け、斯うして置いて己等は家の中に入らう。さあ早く遠くに來い、嗚呼また泣き出した、あゝ喧しい、嗚呼聲が何處までも付いて來る何處までも聞える。あゝ實に厭やだ。彼の聲を聞け、あゝ何んて云ふ厭やな聲だ。

あゝ行つてくれ、行つて口を塞いで來てくれ、あゝ汝は泣く、何を泣くのだ

さあ行つて來てくれ早く行つて來てくれ……あゝ聲が愈烈しい。

なんて兒を捨てゝ置いて、而してこれを殺さうなどゝは、不了見もこれより甚だしいことはねえ。

## ▲不健全極まる現代の文藝（三）

新小説にも、矢張り暗い〳〵穴の中を手探りながら匍つて行く此類の小説が多い。先づ第一が小川未明の『赤い實』だ。何しろ書出が

『お兼さんは死んでしまつた』

風は頻りに吹いてゐて、空は黄色く、塵埃が漲つてゐると見えて濁つてゐた、青木の黒ずんだ葉が動いて居る。赤い實も黒ずんでゐると思つた。

と云ふのだもの、陰氣臭からぬ筈はねえ。だから

子供の時分、私が厭な臭ひのする煎藥を飲ませられたのも、ちやうと今時分の氣候である……母が床に臥つて熱臭い室の中で呻吟き、茶色に光る唐金の藥沸しで、村の漢法醫がくれた藥を煎じて、手拭鉢巻姿で、飲んだのも此頃

である。

ことを想ひ出され

何處が面白い

……婆さんは片手に紫色の葉を握つて居た。何にするのだと聞いて見た。

……熱病の藥にでも成かと聞と、さうではない狂人に飲ませるのだと云た。

ことも想ひ出され、賑かで無邪氣な子供を連れて招魂祭に往つても

やはり風の吹いた日でつた。櫻の花が散つて、慘たらしく散り殘つた櫻の花

は破れて白く枝に喰付いてゐる。

而して『此の風を關として春が葬られて了ふやう』に思はれるのだ。コンナ了

見だから何を見ても面白く思はれぬのも無理はねえ。

この單調な土手、何と陰氣でないか。何と疲れてゐるではないか。風は吹い

ゐる。ちやうど此の世の末日の光景を、何處かに彷彿せしめてゐる。

何だと、此の世の末日！これ位な事で此世の末日が想ひ出されて堪るもんか。

神經衰弱にも程がある。

私は理窟は嫌ひだといつたが、實にさうだ、批評家や、殊に形式的のことを

言ふ批評家及び哲學家は、陰氣な、單調な土手を幾つも築く。

馬鹿を云へ。『だから俺に此頃の小説が嫌ひだと云つたが、實に然うだ。此頃の

小説家や、殊に自然主義に囚はれて居る小説家及之を擔ぎあげる批評家は、陰

氣な、單調な土手を人生に幾つも築く』。俺は云ひたい。

次が勝屋錦村の『疊』だ。若氣の至り、戀の奴となつて、或デカダン肌の文學

者と乳繰り合つた女が此小説の主人公で、此女を中心として周圍のきたない事

情や人物が描き出されてある。此女の母と云ふのは、可い年をして居ながら、

何時も若い者をドッサリ家に集め若い形容をして方々遊びに出かけ、而して行

先で酒を飲んで歸つて來ねえと云ふ白痴、妹は妹で又肩揚の取れぬ中から、種

種な男と密着いて始末に終へぬと云ふ徒らもの、出る人物も出る人物も一人と

して讀者の快感を惹く奴はねえ。併し此主人公は過つた過去を回想して大悔恨

をして居るし、其祖母と云ふ人の人物が確乎してゐると云ふから、幾分か讀者

に快感を與へ、一道の光明も其間に認められぬではねえが、筆が足りねえのが遺憾だ。此小説にも……が彼處此處に入つて居る。併しこれは悔恨に伴ふ追憶の情だから、明さまに書いたつて讀者の淫情を摘發することもなからうに、ケチなことをしたものだ。

後藤宙外の『五日市』、之は前を讀んで見ねえから判らねえが、陰氣臭い悲觀を以て滿たされて居る點から見れば、現代文藝の範疇を出ねえ代物だ。

啓介は愈々左樣思つた『僕の好きな人は皆後から、後からと死んで了ふ。お夏婆やは何時死ぬだらう』と斯考へては、シク〳〵と泣いたのであつた。何しろ讀者に最後の印象を殘さうと云ふ結果の暗示が斯うなんだから、讀者を暗い穴の中に禁錮するのは前同斷だ。

文藝倶樂部の長谷川時雨の『暗』こいつは題其物が暗だから、其内容は讀まねえでも推し量られる。溫泉宿の女中が眼病にかゝり、段々失明する經過を敍したもの、人物に同情して居る點がねえので、讀んで居ても眞實に盲になる氣持がする、何處が面白くてコンナ物を書くのか。思へば〳〵實に不健全極まる現代の文藝ぢやわい。

## ▲不健全極まる現代の文藝（四）

太陽には廣津柳浪の『愛と愛』が出て居る。女の肺病が傳染してこれが爲に男が死に、女は毒を仰いで死ぬと云ふ筋で、暗い穴を手探りながら匍つて往くのは、前記の小説と寸毫も異つて居ねえ。親の愛と女の愛との衝突を描かうとするなら他にモット手段がありさうなものだ。舊い話だが『北條時政討つて見せう』と云ふうちには悲壯の分子が含まれて居て、人間の決心と斷行に伴ふ一條の光明を認めることが出來る。併し、コンナ情ない儚ないことを書かれては讀者は唯劇しい哀感に打たれるだけで、少しも快味を感じねえ。浮世の儚ないことを感ずるだけだ。

何處が面白い

浮世と云へば、一體今の小説家は人間の生活を何と心得て居るのか、彼等の考へによると、人生は悲哀の總計だ。人間の生立、境遇、周圍、教育、遺傳、思想の漸化等を勘定に入れねえで、冷静に客觀的に之を觀察すれば、成ほど人生は悲哀の總計かも知れねえ、併し個人自身の主觀には常に何等かの光明を見越して生活して居るのが人生の眞相だ、其光明は人によつては種々色を異にして居るが、兎に角人間は此光明を見越して生活して居るのだ。又見越し方も人によつては大に異つて居る。或は明日の光明を見越し、或は一月先き、一年先きの光明を見越すのもあれば、百年後の光明を見越す偉人もある。其見越し方に相違こそあれ、人間は兎に角此光明を見越して存在して居る。而して其處に生活の尊ぶべき努力と云ふものが存在するのだ、人生の面白味はこゝにある。其見越して居る光明が果して見越して居る年月のうちに見えるか如何かは全然別問題だ。併し人間は實にかくの如くにして生存して居のだ。

此主觀を沒却しては人生は無意義だ。然るに現代の文藝は此主觀を全く沒却して居る。故に不健全なる思想が殆ど滿幅の姿を呈して居るのだ。

まこと人生を悲哀の總計だと自覺すれば、小説家夫自身が既に自殺でもして居なければならぬ。然るに自殺もせず、盛にコンナ不健全な小説を書いて居るのを見れば、彼等も矢張り何處かに人生の光明を求めて生存し、努力して居ることが判る。自然主義は或は自然を蔑如したロマンチシズムの潮流に反抗して興つた一の運動かも知れぬ。架空の人生に對して眞實の人生を露出せんとした眞面目なる一の運動であるかも知れぬ。其動機や大に愛すべしであるか、此主義の假定には右のやうな一大誤謬が伴うて居る。だから、自然主義には悲觀と猥褻が附物になつて居る。猥褻は其筋の檢擧によつて續々と罰せられるので勢ひ悲觀だけが殘つて、而して今日の文壇に不愉快極まる沈鬱な空氣を漲らして居るのも無理はねえ。

此現象は近頃新しく發刊された富山房の雜誌『學生』にも現れて居る。之れに載つて居る小川未明の『雲』が卽ち夫だ。同雜誌を通覽すると所謂ブッシング、ッ、ゼ、フロントと云ふ健全なる思想の養成に盡瘁しようとして居る努力が各處に現れて居るやうに見える。『雲』の次に出されてあるさねつぐの『馬車馬』が其一例だ。然るに之と相並んで居る『雲』は如何なものかと云へば、死人を同想する女々しい哀感を歌つたものだ。コントラストが劇しい爲、矛盾が特に目に立つて、悲觀厭世の情が現代文藝の普通的性質であることが益明かに讀まれる。

以上列記した小說は現代文藝の不健全なる思想を最も著るしく反射したもののみを擧げたので、其他何と云ひ、何と云ひ悉く此思想に支配せられぬ小說は一もなしと云ひたい位だ。併しさのみはとて厭の來ねえうちにこれで止すことにはするが、序に新體詩にも、矢張り此形蹟があることを一寸玆に紹介して置かねば役目が濟むめえ。

社中の一記者が曩に不良少年の事を書いた折に、現今の新體詩なんかも確に不良少年を生む原因の一となつて居ると云つて、前田夕暮の姦通歌を例として擧げたことがある。夕暮とやら云ふ人間には一寸お氣の毒だが、こゝにも亦不健全極まる現代文藝の一例として同じ人間の新體詩を擧ぐるの不幸を吾人は大に悲しむと云ひたい、併し同じ槍玉にあげられてもあげられやうに由つては、非常に得をすることがある、換言すれば、其新體詩が記者の槍玉にあげられたが爲、却て人の好奇心を挑發して、大に賣れ出したと云ふことだから、さうも心配するに及ばねえ、今度もモ少し我慢しなせえ、こゝに其槍玉にあげられる新體詩てえのは創作に出て居る彼の『沈める眼』と云ふのだ。

日光のあかるきなかを物倦みし女の兒のわがかたに來る
冬の朝女の赤き咯啖のにじみし綿をおもひいでける

臭剝と苦味のにほひに馴れてけるわがわかき日の淋しかりけり
みだらなる町の裏なる小さなる醫院の壁のくすりのにほひ
南風の海をわたりて吹きいづるにみだりがましき大磯の町
一讀して何とも云へぬ不愉快なる感が起るぢやねえか。一體今の文藝家は歌てえものを何と心得てる。若し夫れ
うすみどり林間に入れば君が眼に光そふなりくちづけをする
うしろよりわが唇を吸ふ前髪のやはらかなるを忘られかねつ
いかにして沈める眼ぞと妻となる子が右の眼を輕くすひける
に至つては所謂立派な風俗壞亂罪が成立して居る。

## ▲文藝は人間妖務の一

不健全極まる現代文藝の例證は、これでまあ澤山だらうと思つて居たら、生憎今度新しく發刊された三田文學がべらんめえの机上に舞ひ落ちた。處が此雜誌の裏表紙を見ると

文藝の嗜は人の品性を高くし精神を娯ましめ之を大にすれば社會の平和を助け人生の幸福を增すものなれば亦是れ人間要務の一なりと知る可し

と云ふ福澤先生の眞蹟が木版刷になつて出て居る。だから幾ら現代の文藝雜誌だからつて、之にはよもや不健全な思想が現はれて居ねえだらうと、安心して讀んで見るてえと、べら棒な勘違ひだ。而も椋十翁が所謂『怪しからぬちうもの』が一杯出て居る。法律上ではまさか風俗壞亂罪をも構成しめえが、文藝の裁判所では立派な猥褻罪を構成すべき小說や新體詩を臆面もなく載けてある。

先づ第一が三木露風の『快樂と太陽』だこれは一名日光を恐るゝ歌、むぐらもちの歌、耽溺の歌、未練の歌とも云ふべく夜が明てもまだ〳〵女と抱かれて寢て居たいと云ふ心持をうたつた珍無類の歌だ。

あゝ窓を閉ぢよ我女。

何處が面白い

いかなれば汝の目の訝しみ我を見まもる。
そは汝と太陽との、……
そは快樂と太陽との、……
今や恐るべき 鬪 によりて色移らんとする我面を。
靈の蒼ざめて顫ふ面を。
くるしみの犯さんとする我面を。
あゝ閉ぢよ窓を……
又其の『▲▲▲』と云ふ歌にも
深い深い夜。
また汝は同じ手付をして髪油を塗る。
死人の皮膚を嗅ぐやうな髪油を……
死人の皮膚を嗅ぐやうな髪油……聞いただけで慄とする。ゾラ一派の狂者でな



ければコンナ香を好く奴があるものか。
風が靜まるやうだ。
煙爐をあたゝめよ……
汝の瞳の中で、
性慾が苦痛を表はして居る。
いくら性慾が苦痛を表はして居たつて、死人の皮膚を嗅ぐやうな髪油を塗る女と抱かれて寢て堪まるもんか。色情狂だ。
次が山崎紫紅の『着物』だ。これは淫亂なる後家が住時を回顧して性慾の發作に苦しめられる情を描いたものだ。例によつて讀者の淫情を挑發しさうに思はれるふしをアチコチと拔き書をして御覽に入れ現代文藝の不健全なる例證は穢はしいから斷然これで止すことにする。
……聲と一緒に私の手が痛いの、あつと思つたら、何時の間にか義一さんの

マントの下で二人は手を堅く握つてゐたんだわ

……山内で、お靈屋の後の山へ、義一さんと私とは、頬と頬とをくつゝけ合つてあの坂を上つたつけ、私の胸はどきまぎして、そして宙を飛ぶやうに、あの石段を上つた時に、月夜だつたね、義一さんの面は火照つて、息をせいく〳〵して……

……ねえと云つて締めた手が、手の平と一緒に私の心を嚴しく締めた、いつか私の右の手は義一さんの左の腕に……確うと握まつてゐたの、私の前髪はあの人の胸にひつたりとくつゝいて……

……そんなことに急に來られてどうなりませう、まだ三年にしかなりやしない、人目を忍ぶ三年が、まゝどれほどの長い時間でせう（べらんめえ曰く此女は其義一さんとやらと姦通をして居るのだ）

……あの内の二階で三間しかないのを幸ひに借切にして義一さんに宿換させて、顔を見るたび、手を取るたび、私の息は義一さんの胸に通ひ、あの人の目ははつきりと私の目と合ふんだわ

（鼻を蠢めかして小袖を嗅ぎ）氣のせいか義一さんの移り香が未だに薫つて居るやうな……

……分けてまたあの吉野さんが、奥樣と御同伴のを見せられては――あの時ばかりは利行（べらんめえ曰く利行とは此女の死んだ亭主だ）が欲しい、そして思ふさまいちやつついて……

全然枕草紙の説明を讀むやうだ。これでは福澤翁の文藝に對する折角の觀念が次のやうなものになつて了はねばならぬ。

文藝の嗜は人の品性を卑しく精神を煩はし之を大にすれば社會の平和を破り人生の幸福を減ずるものなれば亦是人間妖務の一なりと知る可し。

何と情ないことではねえか。他は必ずしも言はざるべしだ。

## ▲厭世悲觀の敎唆

一體今の小説家は何と思つて小説を書いて居るのか。俺等は先づ斯う云つて今の小説家に聞いて見たい。文藝の爲の文藝論など、何の役にも立たねえ議論は姑く措くとしてだ、先づ普通の人間ならば、小説は讀んで樂むものだ、斷じて不愉快な沈鬱な想をする爲に讀むのではねえ、暫時生活の勞苦を忘れて其處に慰安を求めようとするのが文藝の目的だ。小説家は勿論此心を心として小説を書かねばならねえ。でなくば、小説や新體詩は無用の長物だ。長物どころぢやねえ。無用の害物だ。害物中の害物だ。

かう見ねえよ、今日の人間は昔の人間のやうにアッケラカンとして鼻汁を垂らしては居られねえ。社會が進歩するに隨つて、世の中の生存競爭が益劇甚を加へて來た。文明が進歩するに隨つて、人間の神經が益過敏に成て來た。一刻も安閑としては居らねえ。此節では如何な田舍者だつて、五十年前の二等國の大臣よりも氣心を遣はねばならぬことゝなつて居る。見地も廣く、思想も複雜になつて居る。やれ學制案の運命が如何だの、やれ英國皇帝が崩御された の、日英博覽會の準備や開會式が如何だの、日露協約が如何だの、長沙の暴動が如何だの、首なし事件が如何だのと、總て此等の事件は一日々々の新聞紙によつて報道せられ、如何なる者も多少は此等の事件に關して心配をせねばならぬ、否心配しねえでは居られねえ時と成て居る。のみならず日常のくだらねえ些事迄が、人間の神經系統を刺戟して其組織を消耗して居る。一寸電車や汽車に乘つた所が、其微少な震動や、間斷なき響や、都會の市中に散見する諸種の小景などが、俺等の頭を攪亂して精神を疲勞せしむるとが實に夥しい者だ。これだけの事でも俺等の神經は既う衰弱して了つて、遺傳的ヒステリー症に罹つて居る者さへも少くねえ。現今の文藝家は現に此ヒステリーに罹つて居る。此上社會的の使命を忘れた彼等の小説や新體詩に連られて、暗い暗い穴の中の

御供をするなんかは考へても身震がする。唯でさへ暗い穴を匍つて居る此節の人間を、一層ヨリ暗い穴に引入れようとするのは、實は憎むべく恐るべく許すべからざる一大犯罪である。此犯罪を罰するの規定は慨むらくはまだ法律に明文がねえ。現今の法律には風俗壞亂罪が規定せられてある。治安妨害罪が規定せられてある。併し不健全なる思想を發表して、人を大悲觀に陷らしめ、延いて犯罪を教唆し、厭世自殺を教唆し、發狂を教唆するの所爲を罰するの規定がねえ。否規定はある。規定はあるけれど其筋ではまだ之を之として罰するの勇氣がねえ。證據を擧げるのは或はむづかしいかも知んねえが、こゝに或人間があつて、其人間が或小説を讀んだ直接の結果として或犯罪を犯し、又は自殺し發狂したことが事實でありとすれば、其小説家を其犯罪の教唆者、其自殺の教唆者、其の疾病の加害者として罰する理由は十分に之あると思ふ。人をして厭世悲觀に陷らしめる罪は、風俗を壞亂する罪、秩序を紊亂し、治安を妨害する罪と竝行して、人類滅亡の一因を爲す一大犯罪である。法律が彼を罰して此を罰せぬのは一刻も早く充實しなければならぬ手ぬかりである。否解釋如何によつては此も彼も一樣に罰することが出來るぢやねえか。其筋でも徒らに風俗壞亂罪ばかりを檢擧して居ねえで、チト厭世悲觀罪を檢擧したが可い。

べらんめえ終

大正三年七月十二日印刷
大正三年七月十五日發行

べらんめえ
定價金七拾五錢

著者　桐生政次

東京市神田區小川町四十一番地
發行者　樫村喜久太郎

東京市京橋區宗十郎町十五番地
印刷者　高木恒吉

許可
版權所有

發行所　東京市神田區小川町
（振替第一二三三六）
敬文館（電話本局四八五五）

東京國文社印刷

横山健堂著　小杉未醒裝幀

# 縮刷 大將乃木

天金袖珍頗美本
紙數約七百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
特價金壹圓
送料 內地金八錢 滿韓金弁錢

▲收賄瀆職の問題沸騰して世は濁浪の爲めに流沒されんとす、日本國民の面目を如何にすべき、此時に當りて謹嚴にして忠直、至誠を以て始終一貫したる大將乃木一代の行儀修養を知らば必ずや權威ある而して意義深き豪快の感、壯美の念、を奮起すべし、慨世憂國の誠意ある人の爲めに特に縮刷したる所以夫れ玆にあり。

▲曩に本書の發行するや、多〜の類書を壓し忽ち三十版を重ぬるの盛況を見、洛陽の紙價爲めに暴騰せり

---

文學士　横山健堂著

## ◎大將乃木

大版函入頗美本
定價金貳圓貳拾錢
送料 內地金拾貳錢 滿、韓金四十錢

明治の神人たる乃木大將の評傳にして、好評嘖々たるもの、著者闊達の筆、能く大將の風姿を彷彿せしむ、蓋し國民的の大著述たるを失はず。

笹川臨風著

## ◎男性美

意匠斬新頗美本
定價　金七十錢
送料　金八錢

著者が溝勃たる氣を吐けるもの、大正新人の男子道を說き盡して餘蘊なし、青年の好讀物と謂つ可し。

文學士　横山健堂著

## ◎新人國記

天金菊判函入
定價　金貳圓廿錢
送料 內地金拾貳錢 滿、韓金四十錢

著者は趣味の人なり、而して人物を論じ、風土を論ずるに闊達の筆を以てす、妙味眞に當世の異彩なり、本書はその粹を集む。

文學士　横山健堂著

## ◎舊藩と新人物

菊判函入美本
定價金貳圓五十錢
送料 內地金十六錢 滿、韓金四十五錢

紙裏蛟龍躍り、猛虎嚙むの慨あるもの、本書特色の存する所なり、新人國記を讀みたるものは、又本書を繙かざる可からず。

山路愛山著

## ◎伊達騷動記

菊判函入美本
定價 金壹圓
送料 金八錢

本書は史學の大家愛山先生の、一々典據ある事實によつて、伊達騷動の眞相を、正確に且つ面白く紙上に活躍せしめたるものなり。

山路愛山著

## ◎加賀騷動記

菊判函入美本
定價 金七十五錢
送料 金八錢

加賀騷動の眞相を容易に理解せしめ、興味多く一般讀者の歡迎する處なり。

文學士 白河鯉洋著

## ◎諸葛孔明

洋裝總布美本
定價 金壹圓
送料 金八錢

古今東西の偉人中殆んど其比を見ざる迄に完全なる諸葛孔明は、本書によつて遺憾なく其の面目を躍如たらしむ、其文致も全く孔明の人格に一致す。

吾恥庵主人著

## ◎青年修養我愛する偉人

天金總布美本
定價 金五十錢
送料 金六錢

凡ゆる偉人傳中諸葛孔明を物色し、透徹の識見と熱烈なる文辭とを以て之を評論したるもの、青年修養の好評書。



山路愛山著

## ◎書齋獨語（其一 其二）

四六版美本
定價各金六十五錢
送料各金八錢

愛山先生の社會萬般の事象に對する大獅子吼にして、激勵風發光風霽月の好文字、以て文範となすべし。

圖南生選

## ◎お國自慢

四六版美本
定價 金六十錢
送料 金六錢

お國自慢は即ち一のローカルカラーにして、如何なる處に、如何なるお國自慢ありや、一讀するも亦樂しからずや

大月隆仗著

## ◎兵車行

菊判頗美本
定價 金九十錢
送料 金八錢

若者が徹底せる眼光は、戰場生活の眞諦を攝み、殺氣滿々たる陣頭の實況を、平かに且つ麗はしく書ける戰記物語にして、通俗的讀物として文部省の推薦を受けたり。

由上治三郎著

## ◎鐵蹄夜話

菊判頗美本
定價 金九十五錢
送料 金八錢

實戰の人の率直なる回想談を骨子とし、行文典麗高雅の快文字、報國の赤誠を經とし、盡忠の熱精を緯として羅織せる、明治武士道の精華なり。

出口競著

## ◎全國高等學校評判記

裝幀高雅美本
定價 金六十錢
送料 金六錢

筆路暢達、文に澁滯の氣なく、齒ぎれよく、全國の高等學校の品隲、槩として浮畫圖をなす。

笹川臨風著

## ◎三國時代と諸葛孔明

菊版函入美本
定價 金壹圓
送料 金八錢

人生意氣に感ず、古來一死君國の爲めに竭したるもの多けれども未だ孔明の如きはあらず本書は文章雄勁、三國の英傑が活躍を目睹しつゝ孔明と共にあるの思あらしむ。敢て意氣を尙ぶの士に薦む。

文學士 八波則吉著

## ◎趣味と修養

菊判洋裝美本
定價金壹圓三十錢
送料 金十錢

『分り易く面白くて爲になる』とは本書の三綱領、一生を有益に樂く暮さんとするものは、本書を讀め。

坂本箕山著

## ◎賴山陽

菊版千五百頁美本
定價金四圓五拾錢
特價金參圓八十錢
送料（內地 金十八錢 清、韓 金四十五錢）

著者が十五ヶ年間苦心の集積にして、我が國民的大文豪を傳せしもの、本書を措いてその右に出づるものなし。



文學博士 吉田熊次著

## ◎社會教育

菊版五百餘頁
定價金壹圓八十錢
送料 金十二錢

西洋諸國に行はれつゝある社會教育を、組織的に記述せるもの教育家並に一般經世家の愛讀すべきものなり。

竹島茂郎著

## ◎學校園の實際

菊版洋裝美本
定價 金五十錢
送料 金八錢

從來行はれつゝある學校園は一種の風致園に過ぎず、本書はこれが改新を目的とし、著者が實驗に基き、理想的の學校園を、最も實際的に作るの方法を指導せる良書なり。

高師講師 河原橘彌著

## ◎學校用兵式教練教程

新形洋裝美本
定價 金四十五錢
送料 金六錢

著者が實際經驗により、兵式教練を教育的に最も巧みに叙述したるもの、蓋し體操教育の福音なり。

文學士 山內素行著

## ◎日本短歌史

四六版洋裝美本
定價 金壹圓
送料 金十錢

和歌の史的研究にして、これが起原より最近明治歌壇に至る、これが發達興隆を詳說し、加ふるに精細なる年表及び索引を以てせり。

文學士　小林愛雄著

## ◎支那印象記

四六版裝幀優雅
定價　金七十錢
送料　金八錢

新らしき眼を以て、支那の自然と人文とを觀察し批判せるもの神秘の支那は玆に赤裸々に解剖せられたり。

讀賣新聞主筆　笹川潔著

## ◎通俗教育　眼前小景

定價　金七十五錢
送料　金八錢

通俗教育に關する、着眼の奇拔な、面白くて爲めになる好著、全篇悉くこれ達人の達觀なり。

讀賣新聞教育記者　豐岡茂夫著

## ◎大楠小楠

定價　金六十五錢
送料　金八錢

本書はこれ南北朝問題を以て、一世に怒號せる著者の信條を、二楠氏に假りて寄語せる、哀れなる絶筆なり。

高橋淡水著

## ◎楠公父子

菊版美本
定價　金拾五錢
送料　金四錢

吵たる一地主の身を以て君の知遇に感し父子三世一族郎黨を擧げて能く百萬虎狼の大軍に當り忠臣孝子一門に集り實に天下萬世の龜鑑である著者の此著ある少年子弟に此英風を益々振起せしめんとの微意である。



佐々木吉三郎著

## ◎教育的美學

上卷　壹圓貳拾錢
中卷　壹圓參拾錢
下卷　壹圓四拾錢
送料　金拾貳錢

斯界に於ける、最も創造的の試みになれる、教育學と美學との調和的組織を企て、所謂新時代の新教育學を樹立せるもの也。

文學士　吉田靜致著

## ◎倫理と人生

定價　壹圓廿五錢
送料　金拾貳錢

本書は著者が抱懷せる人道的國家主義の倫理觀を披瀝せるもの文檢受驗者の良參考書たるのみならず、一般思想家の一讀を要すべきものなり。

文學士　野明敏治著

## ◎國民教育原論

定價　金壹圓拾錢
送料　金八錢

著者は帝大銀時計の秀才教育學專攻の士、從來教育學の迷妄を斷じ、人道的帝國主義を主張し鼓吹するもの也。

山松鶴吉著

## ◎小學校に連絡せる家庭の教育

定價　金壹圓
送料　金八錢

本書は現代の家庭教育上に注意を要し實行を必要とする實際的の事項を極めて平易に叙述せられたるものなり、されば父兄は勿論一般教育家必須の好讀物たるを信ず。

高島平三郎著

## ◎婦人と家庭

定價 金壹圓廿錢
送料 金十二錢

婦人と家庭との問題を心理學的に解釋せるもの、その理論的研究に加へて、附錄「母より受けたる教訓」の如き、具體的に理想的の婦人を捉へ來れる處、最も趣味深し。

文學博士 吉田熊次著

## ◎我國民道德と宗教との關係

定價 金四十錢
送料 金六錢

著者が宗教及國民道德に關してなせる大論文なり、故乃木大將は本書を精讀せられたりと、この問題は刻下焦眉の大問題なり諸彦の一讀を要す。

醫學博士 三宅鐵一著

## ◎通俗病的兒童心理講話

定價 金壹圓
送料 金十錢

本書は通俗平易を旨としたる病的兒童の性質處置及教育法の大要を說けるもの、病兒の爲めに惱める父兄は勿論、教育家の一讀を希ふ。

文學博士 遠藤隆吉 市川源三共著

## ◎男女青年之心理及教育

附、青年團之指導

定價 金壹圓
送料 金拾錢

社會學及心理學的見地より、男女の心理を說明して、れが教養指導の方法を究明せるもの、青年團の指導に至りては、殊に適切を極む。



山路愛山先生序 柳沼蓬水著

## ◎教師の自白

定價 壹圓五拾錢
送料 金拾二錢

現代教育の赤裸々なる暴露、高潔なる著者の僞らざる告白、本書を手にせずして現代教育を語るものあらば迂腐の徒のみ。

竹下和吉著

## ◎學校に於ける個性教育の研究

定價 金八拾錢
送料 金八錢

個性發揮は各方面に於ける現代の中心問題なり、而して特に教育上に於てはその研究の深甚なる意義を有するものなり、本書はこれが理論的研究に加へては實際的の揭示をも試みたり。

米國教育學博士 西山悉治著

## ◎最近思潮實際教育の新研究

定價 金八拾五錢
送料 金八錢

新進の著者が歐米留學の蘊蓄を傾注せる創造的研究の發表なり識者の一讀を要す。

秋鹿見二著

## ◎歷史的教材教授資料

定價 金壹圓廿錢
送料 金拾貳錢

國定教科書に現はれたる歷史的教材に就いて、親切なる解說を試みたるものなり、實際教育者の重寶とすべき斯界の好伴侶たり。

佐々木清之丞
秋鹿見二 共著

◎教授資料 **大日本物産** 詳解

定價 貳圓三拾錢
送料 金拾六錢

國定教科書に現はれたる、本邦物産四百種に關する解説を詳にせるものにして、地理科教授の良參考書たるのみならず、一般實業家座右の好伴侶たるべき名著なり。

北澤種一著

◎實際教授 **高等小學讀本研究**

定價 金八拾五錢
(上)
(下)金壹圓貳拾錢
送料各金八錢

國語科教材の研究書にして教授事項の研究に止まらず、教科書を中心とせる、國文學的趣味の助長を主眼とし、その實績を收めんとするは本書の使命とする處なり。

◎小學 **國語漢文自習辭典**

定價金貳拾錢
送料金六錢

本書は國定教科書中の文字や語を集め漢字と「ことば」に分けて漢字には音訓を施し「ことば」は發音通り五十音順に列べ別に正しい假名遣を示してある、小學生の尤も必要のものである。

吉丸一昌著 (文部省檢定濟)

◎**乃木大將夫人の歌**

定價 金五錢
送料金二錢

乃木大將夫人の淑德をして、咏誦の裡に體得せしめんとするもの、曲調又嶄新なり。



吉丸一昌著

◎幼年唱歌改正 **新作唱歌**

自一集至八集既刊
定價 金各二拾錢
送料 金四錢

隔月に刊行して、學校教育の唱歌教授の資料たらしむるものなり。好評嘖々。

藤川淡水著

◎**論語お伽噺**

定價 金七拾錢
送料 金八錢

やすくてきれいなお伽噺。面白くて爲になるお伽噺。誰れにも讀めるお伽噺。

明治四十五年四月改正文部省御許可

◎改正 **手旗片假名信號法**

定價 金七錢
送料 金二錢

最も文明的に改正されたる手旗信號法なり。

文學士 丸井圭次郎著

◎日本外史 **青年漢文教科書**

定價 金三十錢
送料 金六錢

(文部省檢定濟)

青年指導研究會編
業間補習 **青年讀本** （全二冊）
定價各金三拾錢　送料各金六錢

**同上參考書** （全一冊）
定價金二拾錢　送料金四錢

青年指導研究會編
補習教育 **農業新讀本** （全二冊）
定價各金廿五錢　送料各金六錢

**同上參考書** （全一冊）
定價金拾五錢　送料金四錢

佐々木清之丞編
青年必讀 **國語漢文教本** （全二冊）
定價各金廿八錢　送料各金六錢

**同上參考書** （全一冊）
定價金二拾錢　送料金四錢

河合五三郎
星野半五郎 共著
系統的 **實業新算術** （全一冊）
定價金三拾錢　送料金六錢

大山幸太郎編
系統的 **實業新讀本** 定價（上）金廿七錢（下）金卅錢　送料各金六錢

高橋喜藤治編
大正 **實業補習讀本** 上中下各金廿錢　送料金四錢

高橋喜藤治編
國民教育 **補習讀本** 上下各三拾錢　送料各六錢



佐々木清之丞編 （大正貳年新刊）
大正青年 **國語漢文讀本** 上下（全二冊）
定價各金貳拾七錢　送料各金六錢

蘆田惠之助著
**作文補習教本** （全一冊）
定價金貳拾五錢　送料金六錢

久米卯之彥編 （大正貳年新刊）
十八史略 **青年漢文教科書** （全一冊）
定價金參拾錢　送料金六錢

久米卯之彥編 （大正貳年新刊）
論語 **青年漢文教科書** （全一冊）
定價金參拾錢　送料金六錢

青年指導研究會編 （大正貳年新刊）
新編 **補習讀本** 上下（全二冊）
定價各金貳拾五錢　送料各金六錢

青年指導研究會編
補習用 **算術教科書** 前後（全二冊）
定價各金貳拾錢　送料各金六錢

東京高師訓導 村野幸二郎編
尋常五六年用 **國語辭典**
上製　製本
定價金參拾錢
送料金四錢

小學校の兒童をして辭書を用ひしむるは尋常五六年よりするを最も適當なりとす。本書は凡て發音によりて見出すの方法を用ひたれば尋常五六年用として最も適當のものなり。

山口縣中學校教頭　高桑良興著

## 爬虫類學講話

菊版洋裝美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

自然に關する智識を豐富にすることは聽て自然界の征服である、この點に於て本書は最も簡易平明に、然かも趣味ある記述によりて不知不識の裡に之れが進化論的知識を豐富にする爬虫類の常識讀本である。又專門研究家並に教師諸君の教授資料として蓋し斯界の第一品である。

トルストイ作
文學士　前田太郎原譯

## 生ける屍

中版美裝
定價金八拾錢
送料金八錢

人生の眞想を徹底的に然かも赤裸々に活躍せしむる舞臺は、光彩陸離として宛然ヤスヤナポリヤナの偉人を地下に起して再び彼が全生涯を通じての絶叫を續けしむるの想あり。

東京正則學校講師　傳法久太郎　間崎勝義共譯
ユニヲン第四讀本

## 詳解講義

中版函入美本
全一冊
定價金壹圓四拾錢
送料金拾貳錢

(一)譯文は嚴正流暢に巧に意譯と直譯との中庸を取つて居る(二)難解の文句には一々比較類例參考等を擧げて說明し原文一頁に對し註釋十餘頁に涉つて居ることがある(三)今日坊間に行れて居るユニヲン註釋書は多くは其最初の十數章を載せてあるに過ないが本書は實に其全卷に亘つて居るのである。

野口秀敏著

## 分類詳解算術模範例題解法
（一名算術問題暗示辭典）

中版頗美本
定價金壹圓
送料金八錢

東京時事新報評
數多き算術問題中より代表的のもの數百題を選み之を易より難に排列し以て算術解法に妙味を與へんと力めしもの也。卷末に藤澤氏、國枝氏、樺氏、寺尾氏、吉田氏、林氏、高木氏、澤田氏等算術書に就て類似問題對照表を附せるは尤も氣がきゝたり。



學習院教授　天野一之亟著

## ◎代數の講義

上卷金壹圓
送料金八錢
下卷印刷中

すべて數學の講義は教場では存外分かる事でも書くと仲々分りにくい事が多い、夫れで著者は色々研究工夫して大概の代數教科書に出る樣のものは殆んど漏さず載せ、其解き方から其解方に注意すべき事が丁寧に證明してあるから、こんなよい獨習書はあるまいと思います。

中等英語研究會編

## ◎邦語英文法捷徑

四六版美本
定價金五十錢
送料金六錢

本書に依りて神田文典二卷を學ばんか書中の事實は悉く明快なる日本語となりて問題は夫れ夫れ其解答を伴ふて諸君の前に現れん

中等英語研究會編

## ◎邦語中學英文法初步

四六版美本
定價金五十錢
送料金六錢

本書は「邦語英文法捷徑」の姉妹編にして若し夫れ本書によつて神田文典第一卷を學ぶとせんか、書中の幾多の問題は一々叮嚀なる日本語となりてさながら眼前に教師の巧妙なる講義を聞く思するであらふ。

間崎勝義著

## ◎英文和譯祕訣

新形美本
定價金八拾五錢
送料金八錢

英文和譯は又斯學中の一難事に屬す、著者その難點を彙類して、容易に之れを理解し、且つ應用に自在ならしむ、これ又學生諸君の虎の卷なり。

福井縣小濱中學校教諭　間崎勝義著

## ◎受驗必携 英文法解釋祕訣

四六版美本
解答篇二册
定價 金五十錢
送料 金六錢

本書は既往二十年間の諸官立入學試驗の問題を詳に比較商量して玆に「入學試驗の英文法には如何なる問題が出るか」と云ふことに對し歸納的斷案を下すと同時に豫言的垂示をなしたもので其說明の明快にして詳密親切なるかに至つては斯界に其人ありと知られたる著者の獨壇場。

中等英語研究會編

## ◎スタンダート、インク リツシユ、リーダー 詳解議義

三、四、五

近刊
印刷中

福井縣小濱中學校教諭

## ◎ライシング、イン ザアワルー 詳解議義

上卷 金壹圓
送料 金八錢
下卷 印刷中

間崎勝義編

## ◎英文法辭典

近刊

本書は英字書界破天荒の企てに屬するも著者が獨創の見地より、至誠なる英文法研究に資せんとするもの、蓋し英語研究家の一大福音と云ふべし。



第四高等學校教授文學士　大谷繞石著

## ◎開いた處

四六版上製
定價 金壹圓
送料 金八錢

本書收むる所エルスの短篇小說ありメイテルリンクの論文あり、ジロオムの滑稽妙文ありキプリングの旅行文ありヘルンの物語文あり長短總て二十一篇何れも英文と對照して英文和譯の模範と爲すに足るべし、

近代文學研究會編
ピチロ原作文學士中越新二譯註

## ◎英和對譯 脚註 近代戲叢書第一篇 ポオラ

四六版美本
定價 金八十錢
送料 金六錢

近代戲の研究に何人も苦むのは適當なる手引のない事である、戲文學の如き比較的入り惡い物には殊に此感を深くする、本叢書は此欠陷を塞ぐために生れたもので、原文の傍ら嚴密な譯文を添へ、更に周到なる脚註を施したるものである。

オスカア、ワイルト原作
文學士安井淸譯註

## ◎英和對譯 脚註 近代戲叢書第二篇 理想の良人

定價 金八十錢
送料 金六錢

本書はワイルト一流の機智縱横なる警句と現代社會に對する痛切なる諷刺とは隨所に現はれて此一編を彩つてゐる。近代文學を愛するものは是非本書を讀まなければならない。

若畠武次譯註

## ◎英和對譯 雪人形

菊版美本
定價 金三十錢
送料 金四錢

本書は英米の代表的作家の手になれる文學的價値ある短篇に細解を加へたるものなり。編者は多年英國にあつて「倫敦タイムス」其他日本趣味を有する知名の英人の請に依り日本文學の一端を英國に紹介せる人なり

東京府第一高女校教諭 市川源三 丸山庄司 共著

## 韻文教授之新研究

菊版上製美本 全一冊 定價金九拾錢 送料金八錢

現時閑却せられたる韻文を系統的に取扱ふべき所以を論じ、其細案を示し、韻文教授を情的たらしめん爲めに補説教材の必要を説き、韻文教授を徹底せしめんために應用練習の妙用を陳べたり。

東京音樂學校教授 吉丸一昌作歌 本居長世作曲 松本幸四郎振附

## 歌あそび うかれ達磨

菊四倍版 定價金八拾五錢 送料金四錢

本書は日本最初のコミックオペラとして熱狂的歡迎を博したること既に滿都諸君子の了知せる所にして實に學校家庭並に各種の集會劇場等に於ける唯一の樂材たり。

文學士 吉丸一昌著

## 新撰作歌法

菊版頗美本 定價金五拾五錢 送料金六錢

初學の人々短歌の作法を講ずるには從來の如く唯理義に偏したる説法にては實際に益なく、さりとて歌語を並べて古歌を拔萃したるのみにては短歌の精粹を傳へ難し、本書は先生其の教案に依りて清新の詩趣を説くと共に新案の實習方法を講述せられたれば、新舊何れの人も此書に依りて作歌上の基礎智識を養ひ置かざる可からず。

慶應大學講師 柳沼蓬水著

## 校長生活

中版箱入頗美本 定價金壹圓 送料金拾貳錢

現代の文豪山路愛山氏をして一讀三嘆に堪へざらしめたと云ふ「教師の自白」著者、今又筆硯を洗つて本書を叙す。血か涙か、怒號か咆哮か、そも其の感觸せるものは何ぞ、その獅子吼をなす所以のものは何故ぞや。



笹川臨風著

## 英雄經

中版函入 七百餘頁 定價金壹圓三拾錢 送料金拾貳錢

本書は資治通鑑の三國史時代を原文と共に對譯し之に頭註を加へたるものにして英雄の心事瞭然として火を睹るが如く、兼て漢文を獨修するに極めて恰好なり。所謂一部の英雄聖書なり、英雄傳なり、英雄史なり。加之添ふるに時代年表を以てすれば一部の三國史として甚だ完全のものなり。

文學士 沼波瓊音著

## 小説 芭蕉の臨終

中版洋裝美本 定價金五拾錢 送料金六錢

現時歐米各國に於て第一に研究せられつゝある日本詩人は、芭蕉其人なり、翁は實に世界的たるべき高人なるなり、著者年來翁に就て知る事深し、こゝに事實を踏み、空想を搆へて其臨終を寫す、何人も讀過恍としてその醍醐味を忘る能はざるべし。

都新聞記者柴田三郎著

## 義人田中正造翁

中版美本 定價金五拾錢 送料金六錢

至誠一貫、苦戰奮鬪、あゝ血と涙の生涯、著者はこれ翁が同鄕の人、翁が平素の奇行逸話は本書の内に躍如たり。或は泣くが如く或は笑ふべし。

バーナード、ショウ作 文學士 細田枯萍譯

## 人と超人

中版美本 定價壹圓二十錢 送料金八錢

バーナード、ショウの名は今や世界の文壇を風靡して居る、殊に彼をして英名を放まゝにせしめたるものは本書である、譯者は文壇新進の秀才、原著の面影を宛然に髣髴せしむ。

福島縣師範學校附屬小學校 篇

## ◎綴り方教授の實際

菊版美本
六百餘頁
定價金壹圓八十錢
送料金拾貳錢

初等教育界に於ける難問として世に稱せらるゝ綴方教授に付福島縣附屬小學校に於て研鑽數年系統的理論を經と時代的實際を緯として以て本書を大成せり弊店特に請いて之を上梓せり唯に教育者諸君の坐右の參考たるのみならず斯道發達の一助たるや必せり。

現代教育研究會編

## ◎小學綴り方文例

高等二三年用各一冊
尋常四五六年各一冊
定價各金拾錢

仙臺片平小學校長
菊地庄次郎著

## ◎家庭に於ける兒童教養法

菊版函入上製
定價金八十錢
送料金八錢

出校前にはドンナ事をやらすべきか、歸宅後はドンナ事をやらすべきか、日曜祭日にはドンナ用意が必要であるか、長期休業にはドンナ取扱をなすべきか睡眠につゐて注意すべきものはコンナものである、附錄文部省制定小學校作法教授要項等

現代教育研究會編

## ◎高等小學綴り方教本

定價金拾五錢
送料金四錢

大阪府富田林小學校長 葭原善曉著

## ◎小學生をもてる父兄保護者のために

菊版函入美本
定價金八十錢
送料金八錢

家庭は愛の溫室、寛か嚴か、自治獨立の精神、交友と奴僕との關係、早熟の防禦、兒童室の設備と讀書、發問と寢物語、學校と家庭の一致、携帶品と服裝、休業中の兒童取扱、義務教育前に豫め心得べき事等



鹿兒島縣高等女學校教諭 青木折造著

## ◎學校より見たる兒童と家庭

申版函入美本
定價金四拾五錢
送料金六錢

本書は常に父兄たり母姉たる人の切に知らんとする實際的教育を如何なる家庭も如何なる學校もなし得らるゝ程度に於て具體的に詳述したるものなり。

藤川淡水著

## ◎格言お伽噺

四六版美本
定價金五十錢
送料金六錢

著者獨得の輕妙なる筆を以て聖賢偉人の格言を布衍し、二十餘篇の御伽噺となしたるもの、面白く可笑しく書綴りたる物語りの中に知らず識らずの間に少年少女の品性修養書たらしめんとするもの且家庭の訓話資料として無二の良書なり。

大久保留次郎著

## ◎群象の心理

菊版美本
定價金六十錢
送料金八錢

本書は群衆心理の特質、首領、群衆發動原因の救濟等に付詳細なる解說を與へられたるもの苟も國を憂ひ世を愛する政治家教育家、經世家の一讀缺く可らざる一品の良著也。

河崎法學士 山井法學士 佐々木主事共著

## ◎參考法制精說

背皮美本
定價金一圓七十錢
送料金拾貳錢

近時政界の波瀾層々たる際に當り國民教育の忽諸にすべからざる見地より、我皇室と臣民との關係を明かにし、帝國憲法の特質自治制度の本旨文章通俗潔簡にして一讀以て新時代の大義名分を詳にするを得ん。

東京巢鴨病院主任醫學士 中村漾著

## ◎腦神經衰弱自療法

菊版美本
定價 金七十錢
送料 金八錢

著者巢鴨病院主任醫として學術及實地に於て本邦に於ける斯界の泰斗なり該病の益々瀰蔓せんとするを見て諸人救濟の爲め本書を著せり而も一般的に其療法を說明したるものなれば該病患者は勿論頭腦の明快を缺くの士は必讀の好著なり。

醫學博士 田村化三郎著

## ◎國民病 肺病 花柳病 酒毒 自療法

菊版美本
定價 金六十五錢
送料 金八錢

國民病の恐るべきは今更喋々を要せさるべし讀者此書によつて其恐るべきを悟り且之に依りて自療するを得ば幸之より大なるはなからん。

農學士 村井半之助著

## ◎馬の飼養管理

菊版全一册
定價 金三十五錢
送料 金六錢

總論、種類、飼養、管理、惡癖、配合、分娩、發育、馬四種類の稱呼、馬四特徵記載例、等に付親切丁寧に記述したるものである。

田中王堂著

## ◎我が非哲學

菊版上製美本
定價 金六十五錢
送料 金八錢

三年蟄かず飛ばす、暫く沈默を守りて、只管眞理の講究に餘念なかりし王堂先生、爰に筆硯を洗ふて、曰く、我が非哲學と、：嗚呼そも何の謂ひぞ、諸子一本を讀め。



文學博士 幸田露伴著

## ◎日本書道史

近刊
印刷所

文學博士 幸田露伴著

## ◎紋章の研究

近刊

山路愛山著

## ◎哀史

附德川慶喜公

近刊
七月發行

東京師範學校教諭 津崎亥先生著

## ◎游泳法と其實際

四六版上製
定價 金六十五錢
送料 金六錢

横山健堂著　小杉未醒裝幀

# 縮刷 大將乃木

天金袖珍頗美本
紙數約七百餘頁
定價金一圓廿錢
壹萬部限り
特價金一圓
送料内地金八錢
滿鮮金廿錢

收賄瀆職の問題沸騰して世は濁浪の爲めに流沒されんとす、日本國民の面目を如何にすべき、此時に當りて謹嚴にして忠直、至誠を以て始終一貫したる大將乃木一代の行儀修養を知らば必ずや權威ある而して意義深き豪快の感壯美の念を奮起すべし、慨世憂國の誠意ある人の爲めに特に縮刷したる所以夫れ玆にあり。

▲先に本書の發行あるや忽ち三十版を重ぬるの盛況を見、洛陽の紙價爲めに高かりき。

270
470

終